第３３回（２０２６年）鹿児島県青少年国際協力体験事業



The 33rd Kagoshima Prefecture International Cooperation Youth Experience Program

ヤーク ポップ カン イーク
～また会いたい～
















鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県 OB 会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

はじめに



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
会長　弓場　秋信
（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会　事務局長）

鹿児島県青少年国際協力体験事業は，開発途上国で「国づくり，人づくりに 貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し，国際協力への理解を深めるとともに，ホームステイ等での異文化体験，学校等での現地学生との交流を通して，国際性豊かな青少年を育成することを目的として実施しています。本事業は，鹿児島県青年海外協力隊を支援する会，青年海外協力隊鹿児島県 OB 会，公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で実施しており，平成３年にマレーシアに派遣して以来，33 回にわたってインドネシア，タイ，ベトナム，ラオス，カンボジア，スリランカの７ヶ国に県下一円から今回の 17 名を含む 427 名の中高生を派遣してきました。

2026 年は，予算，治安状況，ホームステイ先の受入体制等から候補国を検討するとともに，昨年，青年海外協力隊が 60 周年を迎え，ラオスは協力隊が初めて派遣された国の一つであり，長年にわたり日本との協力関係を築いてきた国であることを踏まえ，ラオス人民民主共和国を派遣国として決定しました。本事業の共催市町である鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，薩摩川内市，霧島市，南九州市，南さつま市，大崎町から推薦された 14 名と，企業の協賛を得ての実行委員会枠３名の計 17 名の団員は，２回の事前研修を経て，７月 19 日（日）～26 日（日）までの日程で，JICA ラオス事務所，青年海外協力隊員２名（看護師隊員・障害児者支援隊員）の活動先視察，ナーサイトン郡ホーナーニャイ村でのホームステイ，現地学生との交流を行いました。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたことが綴られた報告書「ヤーク ポップ カン イーク～また会いたい～」を作成いたしましたので，多くの皆様にご覧いただければ幸甚に存じます。

終わりに，本事業実施に当たりご支援ご協力をいただきました，共催市町，協賛企業，国際協力機構 JICA 九州センター，JICA ラオス事務所，駐日ラオス人民民主共和国大使館，心温まるもてなしでホームステイを受け入れて頂いたホーナーニャイ村の皆様，そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に，心より感謝申し上げますとともに，今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

もくじ

はじめに
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会　会長　弓　場　秋　信

ごあいさつ …… 1
鹿児島県総合政策部　部長　新　川　康　枝

第33回（2026年）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要 …… 2
参加団員等名簿 …… 3
スケジュール …… 4
地図 …… 5
体験事業ドキュメント（総集編） …… 6
～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

団員が感じたこと …… 15
「想像を超えたラオスでの体験」　小　林　　藍
「人生が変わった１週間」　藤　田　結　愛
「何にも代えられない宝物」　北　原　あかり
「世界を広げて」　牧　　美乃莉
「ラオスの温かい人々」　柿　原　宗　青
「ラオスの人の心にある豊かさ」　永　谷　爽　晴
「ラオスに行って感じたこと」　近　森　　郷
「異文化に触れて」　河　澄　裕　貴
「かけがえのない時間」　堀之内　七　彩
「ラオスで学んだこと」　金　丸　京史朗
「相手を思いやる心と笑顔」　徳　永　結　咲
「今までにない出会い」　窪　　古　詠
「ラオスの温かさ」　小　田　采　和
「一価値観，更新一」　脇　山　　葵
「始まりの国際協力」　中　島　宗　助
「私の考える国際協力」　片　桐　　梅
「言葉を超えて，心で響き合う瞬間」　竹之内　智　廣

団長報告 …… 32
「笑顔と心でつながった４泊５日」　弓　場　秋　信

同行者が感じたこと …… 33
「挑戦と温かさに満ちたラオスでの日々」　仮　屋　慶　一
「優しい国ラオス」　サナブリア智子
「同行者として安全と学びを両立するために」　北　村　　愛
「ラオスでの夏」　下　畠　朋　香
「人生で決して忘れることのない１週間」　轟　木　康　陽

新聞記事（南日本新聞） …… 38
ニュース番組（KTSライブニュース 鹿児島テレビ） …… 43
参考資料 …… 44
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

ご あ い さ つ



鹿児島県総合政策部長
新川　康枝

「第 33 回（2026 年）鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

これも，事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ，関係者の御支援・御苦労の賜であり，心から敬意を表します。

また，皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力の取組をはじめ，本事業に代表される青少年の海外体験の促進などに格別の御協力をいただいていることに対して，この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では，参加者 17 名が，7月 19 日から7月 26 日まで7泊8日間の日程で，ラオスを訪問し，現地の病院や障害者職業訓練校で活躍している青年海外協力隊員２人の活動現場を視察されたほか，現地家庭でのホームステイ等を体験してこられました。

今回の訪問国であるラオスは 1965 年に日本が初めて青年海外協力隊を派遣した国であり，日本とは，2025 年に外交関係樹立 70 周年を迎え，政治・安全保障，経済協力，貿易・投資，人的往来など，あらゆる分野での協力関係が強化されています。同年１月には，それまでの「戦略的パートナーシップ」から「包括的・戦略的パートナーシップ」に格上げされるなど，日本とラオスの関係はますます深まっています。

団員の皆さんは，帰国後，7月 28 日に県庁を訪問し，塩田知事及び地頭所教育長に報告をされました。私も同席させていただきましたが，皆さんからは，ラオスの人々の心の温かさや，異文化交流の楽しさ，言語・文化の違いによる戸惑い，青年海外協力隊の活動を現地で視察した感想など，それぞれの体験から様々なお話を伺いました。

今回の訪問で，団員の皆さんが自分の目で見て，感じ，考えてきたことは，実際に現地へ足を運ばなければ体験することのできない，たいへん貴重なものだと思います。それらを心に深く刻み，実行委員会の方や御家族，渡航先でお世話になった方など今回の訪問を支えてくださった全ての方々への感謝の気持ちを忘れず，今後も国際交流・国際協力や国際社会等についての学習を深められ，それらの担い手として，将来，御活躍いただくことを期待しております。

近年，県内の在留外国人の方々も増えてきていることなどから，県民の皆様方が国際理解を深め，多文化共生を進めていくことがますます重要になってきています。県では，今後とも，これに対応する必要な取組を積極的に進めてまいりたいと考えておりますので，皆様の一層の御協力をお願いいたします。

結びに，「鹿児島県青少年国際協力体験事業」のますますの御発展と，関係の方々及び団員とその御家族の皆様方の御健勝・御活躍を祈念いたします。

第33回(2026年)鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

１　主　　催　　鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体　　鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県ＯＢ会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

２　共　　催　　鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，枕崎市，薩摩川内市，
霧島市国際交流協会，南さつま市友好交流推進協議会，
南九州市教育委員会，大崎町

３　後　　援　　鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構九州センター

４　協　　力　　駐日ラオス人民民主共和国大使館

５　協　　賛

㈱鹿児島銀行
鹿児島トヨタ自動車㈱
キンコー醤油㈱
㈱下堂園
大福コンサルタント㈱
日本システム㈱
㈱Ｍｉｓｕｍｉ
㈱山形屋
弓場貿易㈱
鹿児島空港ビルディング㈱
鹿児島ヨコハマタイヤ㈱
小正醸造㈱
城山観光㈱
南国殖産㈱
㈱ヒガシマル
㈱南日本銀行
㈱レイメイ藤井

【五十音順】

６　事業の流れ

３月～５月	募集・団員決定
６月６日（土）	第１回事前研修
６月２７（土），２８日（日）	第２回事前研修
７月１９日（日）	出発
７月２６日（日）	帰国
７月２８日（火），８月５日（水）	表敬訪問
８月１５日（土）	報告会
９月～１０月	報告書作成

７　派　遣　国　　ラオス人民民主共和国

８　派遣期間　　７月１９日（日）～７月２６日（日）

９　派遣人員　　（1）参加者　１７名
（2）同行者　　６名

参加団員等名簿

■ 団 員

	名前	学校	学年	年齢	市町
1	小林（こばやし） 藍（あい）	学校法人志學館学園志學館中等部	3	14	鹿児島市
2	藤田（ふじた） 結愛（ゆい）	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	3	18	鹿児島市
3	北原（きたはら） あかり	学校法人時任学園樟南高等学校	3	17	鹿児島市
4	牧（まき） 美乃莉（みのり）	鹿児島県立鹿屋高等学校	1	15	鹿屋市
5	柿原（かきはら） 宗青（すばる）	鹿児島県立鹿屋高等学校	2	17	鹿屋市
6	永谷（ながたに） 爽晴（あきはる）	鹿児島県立加世田高等学校	2	16	枕崎市
7	近森（ちかもり） 郷（ごう）	枕崎市立別府中学校	2	13	枕崎市
8	河澄（かわすみ） 裕貴（ゆうき）	鹿児島県立川内高等学校	3	17	薩摩川内市
9	堀之内（ほりのうち） 七彩（ななせ）	学校法人神村学園高等部	2	16	薩摩川内市
10	金丸（かねまる） 京史朗（けいしろう）	霧島市立舞鶴中学校	1	13	霧島市
11	徳永（とくなが） 結咲（ゆいさ）	霧島市立陵南中学校	1	12	霧島市
12	窪（くぼ） 古詠（こよみ）	南さつま市立大笠中学校	2	13	南さつま市
13	小田（おだ） 采和（さわ）	鹿児島県立指宿高等学校	1	15	南九州市
14	脇山（わきやま） 葵（あおい）	大崎町立大崎中学校	1	12	大崎町
15	中島（なかしま） 宗助（そうすけ）	屋久島町立中央中学校	2	14	屋久島町
16	片桐（かたぎり） 梅（うめ）	鹿児島県立錦江湾高等学校	2	16	鹿児島市
17	竹之内（たけのうち） 智廣（ともひろ）	鹿児島県立楠隼高等学校	1	15	肝付町

■ 同行者

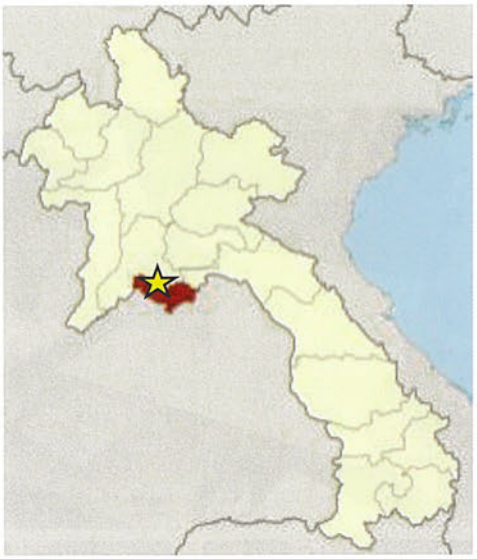
		名前	備考
1	団長	弓場（ゆみば） 秋信（あきのぶ）	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会　事務局長
2	調整	仮屋（かりや） 慶一（けいいち）	青年海外協力隊モルディブOV(体育)
3	調整	サナブリア 智子（さとこ）	青年海外協力隊パラグアイOV(家政)
4	健康管理	北村（きたむら） 愛（あい）	青年海外協力隊ラオスOV(助産師)
5	マスコミ	下畠（したはた） 朋香（ともか）	南日本新聞社 報道部　記者
6	マスコミ	轟木（とどろき） 康陽（こうよう）	鹿児島テレビ放送 報道部

スケジュール

月日	地名	時刻	交通機関	内容	宿泊
7月19日(日)	JR鹿児島中央駅 JR鹿児島中央駅 発 福岡国際空港 タンソンニャット国際空港 テチョ国際空港へ ワットタイ国際空港	5:10 6:04 10:00 16:05 17:45 20:30	 さくら400号 専用バス VN351 VN920 専用バス	集合・結団式 鉄路,新幹線で博多駅へ 陸路,福岡空港へ移動 空路,ホーチミンへ 空路,プノンペンへ 空路,ビエンチャンへ ホテルへ移動	 ホテル
7月20日(月)	ビエンチャン ナーサイトン郡	午前 午後	専用バス 専用バス	ラオス市内視察 （パトゥーサイ, タートルアン） ホームステイ先へ移動 入村式（ホーナーニャイ村）	 ホームステイ
7月21日(火)	 ナーサイトン郡	午前 午後	専用バス 	青年海外協力隊活動先視察 【看護師　杉浦優里隊員】 施設名：マホソット病院 学生交流　(村内のお寺)	 ホームステイ
7月22日(水)	 ナーサイトン郡	午前 午後	専用バス 	青年海外協力隊活動先視察 【障がい児・者支援　牧浦えみ隊員】 施設名：障害者職業訓練校 ホストファミリーと過ごす	 ホームステイ
7月23日(木)	 ナーサイトン郡	終日 午後	 	ホストファミリーと過ごす お別れ会　(村内のお寺)	 ホームステイ
7月24日(金)	 ビエンチャン	午前 	専用バス 	村とのお別れ JICAラオス事務所 訪問	 ホテル
7月25日(土)	 ワットタイ国際空港	午前 20:00	専用バス VN920	ビエンチャン市街地視察 ホテル発 レイトチェックアウト 空路　ノイバイ国際空港	 機内泊
7月26日(日)	ハノイ発 福岡国際空港 発 カクイックス交流センター	1:30 8:50 14:00	VN356 専用バス 	空路　福岡国際空港 陸路　カクイックス交流センターへ 解団式	

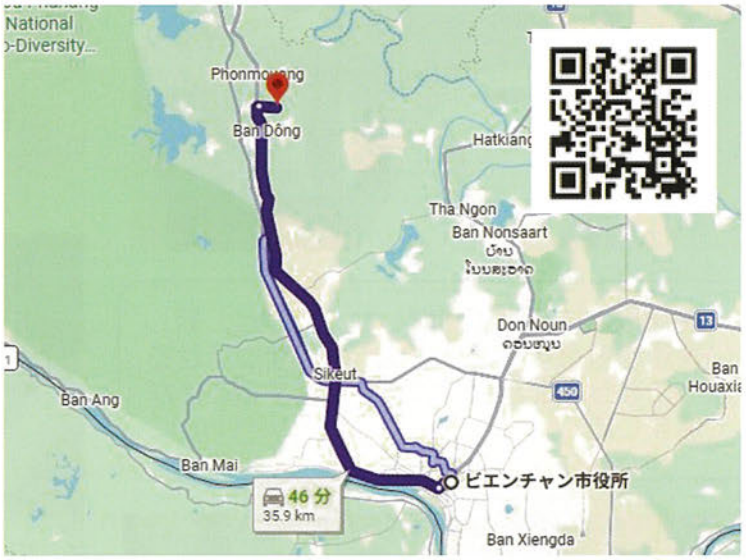
地　　図

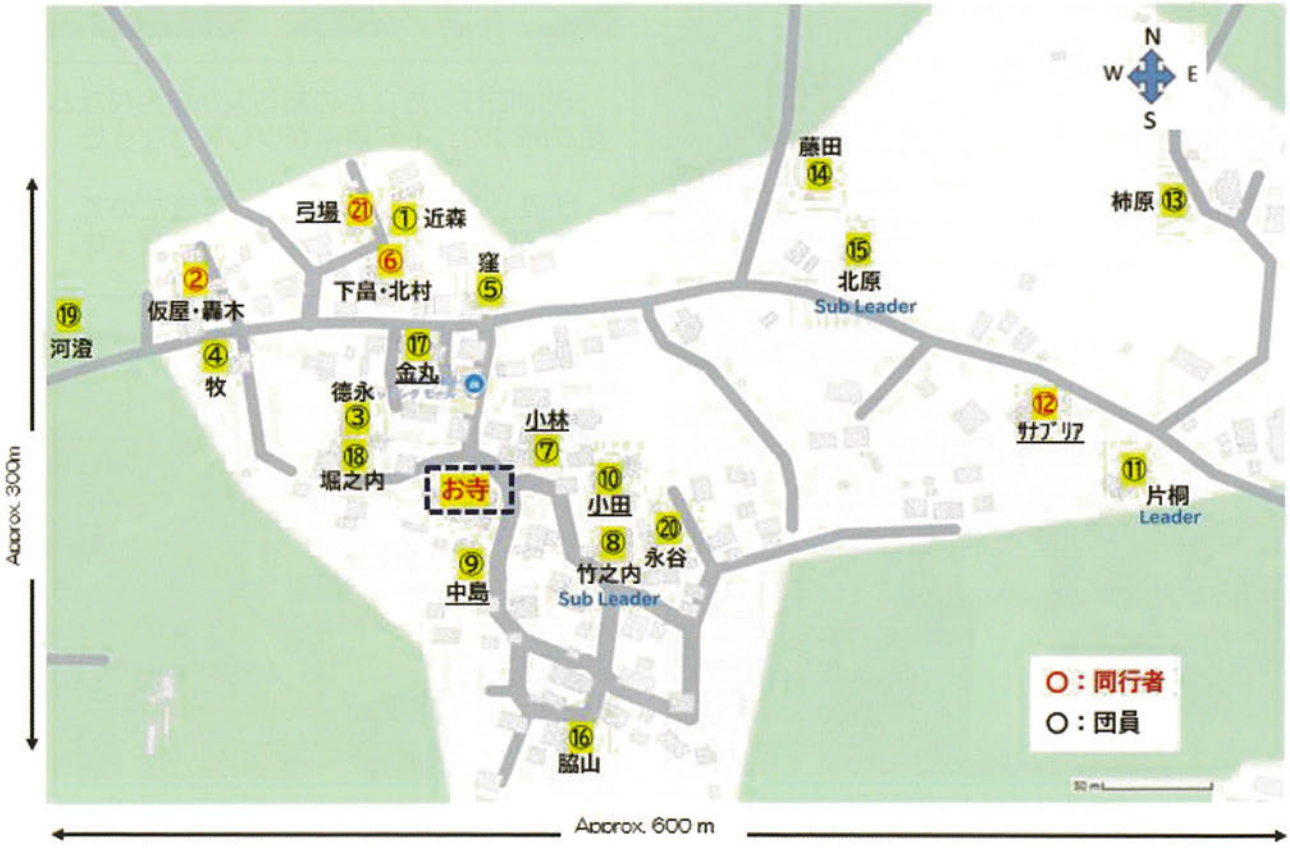
ラオス人民民主共和国ビエンチャン首都



ホームステイ先：
ビエンチャン首都ナーサイトン郡ホーナーニャイ村

BAN HUANAGNAI, NAXAYTHONG DISTRICT,
VIENTIANE CAPITAL, LAO PDR





体験事業ドキュメント（総集編）

6月6日（土）～6月28日（日）

第１回・第２回事前研修







想像以上にラオ語が難しかったけど，新しい言語を習得する難しさや，少しずつ話せるようになったときの達成感を実感することができました。





現地に行ったことのある人から色々なお話が聞けて，不安要素が少しなくなった。

団員との仲を深めることができたので，ラオスに行くのがもっと楽しみになった。



7月19日（日）

結団式・出発

団員それぞれに決意表明！！

「楽しむ！将来について考える研修にする！」

「誰にもできない経験を大切に！無駄にはしない！何かひとつでも成長する！」

「なんでも積極的にチャレンジして一生の思い出にする！言葉の壁を超えて仲を深める！」

「たくさん友達をつくって，たくさん学んで，一回り成長してくる」

「みんなに笑顔で接すること」



7月20日（月）

午前：ビエンチャン視察





「宗教が日本と異なり日常にありました。」

「暑い，曇っているのに直射日光を浴びているようなそんな暑さだった。」

「建造物が見た目で迫力があった。凱旋門では階段がきつかった…」





7月20日（月）

午後：入村式・ホストファミリーとの対面







対面したとき，うまくコミュニケーションが取れず一気に不安になったが，すごく気さくに話しかけてくれ，緊張が和らいだ。



ステイ先が集合場所や他団員達と離れているけど，のどかで自然豊かなのがとても好き！

「ちょっと緊張気味で，ホストファミリーとたくさん喋れなかった。明日はもっと喋れるようにする！」





7月21日（火）

午前：青年海外協力隊活動現場視察（看護師　杉浦優里 隊員）
施設名：マホソット病院





「自分で選んだ選択は，自分で正解にするしかない」どんなに辛く大変でも，ちょっとずつ前を向き，その生活のなかで努力をするという杉浦さんの話を聞いて，自分も将来の夢の実現に向けて勇気をもらえた！



午後：学生交流（村内のお寺）



「子どもたちの名前を漢字で書いてあげた。漢字にするのは難しかったけど，みんな喜んでくれて嬉しかった！」





7月22日（水）

午前：青年海外協力隊活動現場視察（障がい児・者支援　牧浦えみ 隊員）
施設名：障害者職業訓練校

日本とは違い，障がい者への福祉がない。スキルや人間性を高め，自律を促す施設だった。大変でも働こうとしている。尊敬したい。

どんな人とも「私とあなた」対等に会話をすることが何よりも大切。



午後：ホストファミリーと過ごす時間



「言葉が通じず焦っているときでも，伝えようとしてくれることが嬉しかった。
ちょっとしたことでも笑ってくれる。
嬉しい。」

「ホストファミリーと村の子どもたちも一緒にダンス＆運動。言葉を通じなくても，遊びを通じて仲良くなれた！」



「ホストファミリーにみそ汁と卵焼きをつくった。不安だったが，すごく喜んでもらえてホッとした！」





7月23日（木）

終日：ホストファミリーと過ごす１日

朝，ニワトリで起きるの新鮮すぎて最高！
シンを身に着け，早朝の托鉢も嬉しい！





ラオスの人々の優しさや温かさを感じることができた。話しかけてきてくれても，何もわからず戸惑っていたが，みんなジェスチャーを使って，わかるまで優しく丁寧に教えてくれた。言葉が通じなくても，相手を思いやる気持ちがあれば，心は通じ合えると思った。

午後：村とのお別れ会（村内のお寺）





バーシー(儀式)では，村中の人が余れた糸を手首にまいてくれた。別れがもうすぐなのを強く実感し，涙があふれた。





7月24日（金）

朝：村とのお別れ



会えなくなるのが寂しいと言ってくれて，涙がでそうになった。







あなたを三人目の子どものように思っている。これからもずっと元気で，また会いに来てね。と言われ，第二の故郷ができたみたいで本当に本当に嬉しかった。

最後の別れは想像以上に悲しかった。







午前：JICA ラオス事務所 訪問





JICAは，ラオス政府の要請に応じて幅広い支援活動を行っていることを知った。とても興味が湧いてくる活動内容で，もう少し調べていきたい。

7月25日（土）

ビエンチャン市内視察





クロミちゃんやキティちゃんとか日本のものがたくさん売っていて，やはり日本のアニメとかキャラクターは人気なんだなぁと思った。





ビルが立ち並ぶ一方で，ラオスの雰囲気たっぷりの建物が立ち並んでいた。





午後：ハノイ出国



等身大の子どもに帰って，好きなだけ遊んだり，笑ったり，冗談を言い合ったりして，そういうことがすごく特別で幸せだった。

7月26日（日）

帰国・解団式

支援について多くを学んだ派遣であった。現地の方の「今ある幸せ」を守ることのできる仕事に就きたいと思った。





7月28日（火），8月5日

表敬訪問





8月15日（土）

帰国報告会



ラオスの人々との出会いは，自分にとってどんなものにも代えられない経験。これからの人生の大きな財産になった。

不安なことがあっても相談できる仲間がいた。
挫けそうになっても，仲間がいるから，仲間は頑張ってるから頑張ろうと思えた。
そんな仲間ができたこと，これからの人生の大きな財産です。







団員が感じたこと

想像を超えたラオスでの体験

志學館中等部３年
小林　藍

早朝に鹿児島を出発し，福岡空港，ホーチミン，プノンペンを経由して約 16 時間半をかけてようやくラオスの首都ビエンチャンに到着した。空港を出ると，雨季のためか湿気はあるものの，鹿児島よりは涼しく感じられた。また，発展途上国のイメージに反して，夜遅い時間だったのにも関わらず街灯や建物の光で照らされて，街全体がとても明るかったことが印象に残った。

翌日，ホームステイ先に向かうバスの中では，「ちゃんとコミュニケーションできるだろうか」，「ご飯は口に合うだろうか」などとたくさんの不安を抱えていた。しかしその一方で，ホームステイという新たな経験に期待を膨らませていた。そんな緊張している僕をホストファミリーは明るく出迎えてくれた。ホストファミリーがラオ語で話しかけてきてくれるものの，僕はなにも理解することができず戸惑っていると，今度はジェスチャーを使って僕が分かるまで優しく丁寧に伝えようとしてくれた。ちょっとした挨拶が済むと，近所の子供達が僕の手を引っ張ってどこかへ連れて行こうとしてくれた。後から分かったが村の案内をしてくれるようで，他の団員の家で遊んだり，村長の家を教えてくれたりしてくれた。初日から楽しいことばかりで，最初不安に思っていたことも忘れてしまうぐらいだった。

ホームステイでは日本とは違うご飯やお風呂など，初めてで慣れないことばかりだった。家は少し高床式になっており，玄関先にはテーブルと椅子が置かれていてそこでいつもご飯を食べたり，おしゃべりをしたりしていた。食事の際には，ホストファミリーが「おいしい？」や「辛くない？」と頻繁に声を掛けてくれた。最初は辛いものを食べれるか不安だったが，気にかけてくれたおかげで食事を毎回おいしくいただくことができた。お風呂は家の隣にあった小さな小屋で，大きなバケツに入っている水を桶ですくって浴びた。僕はいつも昼間は村の子供達とサッカーや折り紙で遊び，夕方になると家に帰ってお風呂に入り，夜ご飯を待った。食事を終えると，ホストファミリーとお互いの国のことや言葉を教えあったり，その日の出来事を日記に書いたりして過ごした。特に印象に残ったことは，ホストブラザーが牛の世話に連れて行ってくれたことだ。牧場のようなところが家から 5 分ほどのところにあり，柵の中で放牧している牛を小屋の中に移動させるのを手伝った。田んぼの畦道を牛と一緒に歩き，田んぼ越しに見た夕陽が忘れられない。

青年海外協力隊の活動視察では，日本のやり方をそのまま持ち込むのではなく，ラオスの文化や生活に合わせて工夫することが，現地の人々の生活をより良くするために大切なのだと感じた。また，僕は幼稚園生の頃に一度ラオスを訪れたことがあり，それをきっかけでラオスの不発弾問題について興味を持っていた。今回の体験事業では不発弾問題について詳しく話を聞いたり，実際に問題に触れたりする機会はなかったが，職業訓練校を訪問した際，牧浦隊員から「以前は不発弾により障害を負った生徒が多くいたが現在はいない」という話を聞き，不発弾による被害が少しずつ減っていることを知ることができた。

この一週間は，今まで経験したことのないことに次々に遭遇し，人生の大きな財産になったと感じている。ここで得た学びや知識，力，体験はどんなものでも僕を大きく成長させ，そしてこれからも大きな影響を与えてくれると思う。こんな素晴らしい経験をさせてくださった，この事業に関わった全ての皆さんに感謝しています。

コープチャイ！（ありがとう！）



（本人：右）ホストファミリーと食事をしている様子



（本人：中央）牛たちと一緒に見た夕陽

団員が感じたこと

人生が変わった１週間

鹿児島県立鹿児島中央高等学校３年
藤田　結愛

ラオス研修は，私にとって異なる文化を知るだけでなく，自分自身の「当たり前」を見つめ直し，これからどのように人と関わり，どのような未来を目指したいのかを考えるきっかけとなった経験です。現地での活動はもちろん，ラオスへ行く前の事前学習から多くの気づきがありました。たった１週間の研修でしたが，終えた今では，出発前とは異なる視点で世界を見ることができるようになったと感じています。

このプロジェクトの大きな特徴は，現地での活動だけでなく，そこに向けた事前学習にもあります。ラオスの文化や生活について調べるだけでなく，ワークショップやゲーム，アクティビティを通して，異なる文化や価値観を持つ人とどのように関わるべきかをみんなで考えました。意見を出し合う中では，自分の考えを相手に伝える力だけでなく，自分とは異なる意見を否定せず，まず相手の考えを理解しようとする姿勢の大切さにも気づきました。また，文化や価値観，マナーの違いを題材にした活動では，「自分にとっての普通」が他の人にとっても普通とは限らないことを実感し，異なる文化を受け入れるためには，自分の価値観だけで判断するのではなく相手の立場に立って考えることが大切なのだと学びました。

こうした学びを持ってラオスを訪れたことで，現地での一つ一つの出来事をより深く考えることにつながったと思います。ホームステイでは，現地の方々と生活を共にし，日本とは異なる生活習慣や時間の流れを体験。時計に縛られず，自然の流れに合わせて生活する中で，時間に対する考え方一つをとっても文化によって大きく異なることを実感しました。普段「当たり前」だと思っていることから一度離れてみることで，日本での生活や自分自身の価値観についても改めて考えることができました。

さらに，現地の方々との交流を通して，文化や言葉が違っていても，人と人との間には共通する部分がたくさんあることにも気づきました。言葉が十分に通じなくても，一緒に活動したり，笑ったり，相手を知ろうとしたりする中で，少しずつ距離が縮まっていく感覚がありました。異文化交流とは，単に相手の文化について知識を得ることではなく，互いの違いを認め，相手を理解しようとすることなのだと思います。

そして，この研修を通して，私の中には将来についての具体的な目標も生まれました。ラオスでの交流を通じ，異なる文化や価値観を持つ人々が互いに理解し，協力することの大切さを実感したことで，将来は国際協力に関わり，地域と世界をつなぐ仕事がしたいと考えるようになりました。現地の人々の声に耳を傾け，その地域が抱える課題を一方的に解決するのではなく，同じ目線に立って考え，ともに解決策を探していける人になることが目標です。

今回身につけた，相手の意見を尊重する姿勢や，自分の「当たり前」を疑い，異なる視点から物事を見る力は，これからの大学での学びや，将来さまざまな人と関わる中でも大切にしていきたいと思います。ラオス研修は，私にとって世界を知る旅であると同時に，自分の視野を広げ，将来の目標を見つける旅でもありました。

大好きな団員のみんな，温かく迎えてくださったホストファミリー，そしてラオス。たくさんの学びと忘れられない思い出をありがとう。コープチャイ



（本人：左）バドミントン終わりの１枚



（本人：右）子どもたちと一緒に

団員が感じたこと

何にも代えられない宝物

樟南高等学校３年
北原　あかり

今回の派遣は，私にとって念願の派遣であり，これまでの人生の中で最も貴重な経験となった。私は将来，世界中の機会格差の廃絶に貢献するという目標を実現する第一歩として，この事業に応募した。帰国した今，諦めずに応募し続けて本当によかったと心から感じている。

私がこの研修で得た学びの中で，特に印象に残ったことは二つある。

一つ目は，ホストファミリーと過ごした４泊５日である。笑顔あふれるホストファミリーと過ごした時間は，一生の宝物となった。また，村の人々も毎日楽しそうで，とても幸せそうな表情をしていた。どの子どもが家に来ても食事や飲み物を分け合う姿から，人と人とのつながりを大切にする文化を強く感じた。

確かにラオスは，日本と比べるとインフラ整備や衛生面で十分とは言えない部分も多い。しかし，そのような環境の中でも村の人々は生き生きと暮らし，心から幸せそうに見えた。この経験から，「幸せ」と「豊かさ」は必ずしも一致するものではないことを実感した。また，幸せの形は文化や価値観によって異なるからこそ，支援を考える際には自分たちの価値観を押し付けるのではなく，その人たちが何を幸せと感じているのかを理解することが大切だと学んだ。短い期間ではあったが，本当の家族のような愛情を注いでいただき，別れの際には涙が止まらないほど大切な存在となった。

二つ目は，JICA 海外協力隊員の活動視察である。マホソット病院では，杉浦隊員から日本とラオスの医療体制について話を伺った。特に「ラオスの医療は家族ありきで成り立っている」という言葉が印象に残り，家族とのつながりを大切にする文化を知ることができた。障害者職業訓練校では牧浦隊員の活動を視察した。そこで最も心に残ったのは，「健常者と障害者ではなく，『わたしとあなた』として向き合うことが大切」という言葉である。この言葉は，障害のある方だけでなく，将来国際協力に携わる私にとっても大切な考え方だと感じた。「支援する側」と「支援される側」という関係ではなく，一人の人間同士として相手を理解し，その人にとっての幸せを考えながら行動することこそ，本当の国際協力につながるのだと学んだ。

ホームステイや JICA 海外協力隊員の活動視察，JICA ラオス事務所への訪問を通して，ラオスの魅力だけでなく，環境整備や貧困などの課題についても知ることができた。この経験を通して，課題だけを見るのではなく，その国の文化や価値観を理解した上で支援することの大切さを実感した。

そして何より，同じ志を持つ仲間と出会い，一緒に笑い，悩み，支え合えたことは私にとって一生の財産となった。この事業を応援してくれた家族をはじめ，同行者や関係者の皆様，そして協賛してくださった県や企業など，支えてくださったすべての方々への感謝を忘れず，今回ラオスで得た学びをこれからの人生に生かしていきたい。そしていつか国際機関で，世界中の機会格差の廃絶に貢献できる人材となり，「わたしとあなた」という対等な関係を大切にしながら，一人ひとりがそれぞれの幸せを実現できる社会づくりに貢献できるよう努力を続けていきたい。



（本人：中央）村の子供たちとの交流



（本人：左）日本と違う市場に戸惑いを隠せない

団員が感じたこと

世界を広げて

鹿児島県立鹿屋高等学校１年
牧　美乃莉

生まれて初めて新幹線に乗り，空港に行き，飛行機に乗りました。育ってきた地面が離れて雲に近づき，海が一面に広がりました。飛行機が次に地面に近づいて，私の足が地面を踏んだとき，日本語が聞こえなくなりました。囲む人々の多くから中国，韓国の言葉が聞こえてきます。アナウンスは英語に，目に映る食べ物はアルファベットと外国語が書いてありました。私の知らないところで動いていた世界が，そこにはありました。

ラオスの湿った空気を感じながらビエンチャンを観光し，入村式を終え，ホームステイ先に向かいました。そこで驚いたのは英語が分からない人が多いこと。私のホストブラザー，ホストシスターは英語が少し喋ることが出来る人でしたが，あまり家にはおらず，ホストマザー，ファザーとは全く英語が通じませんでした。思ってもいなかったので困惑，不安で胸がいっぱいになりました。

しかし，ホストファミリーと会話ができていなくても，楽しむことはできました。ホストマザーはいつも気にかけてくれて，私がラオス語を少しもわかっていないことを責めず，笑って世話をしてもらってしまいました。ご飯は毎度毎度９歳のホストシスターが私の分を取り分けてくれて，寝るときの準備もしてくれました。托鉢も２日間連続でしてもらい，私が持ってきたお菓子もお坊さんに渡してくれました！最後の儀式の日は，伝統的な衣装であるシンを私の腰に合わせて調節できるように朝から準備してもらいました。会話ができたのは片手で数えられるだけしかなかったかもしれませんが，心が通じあった回数はきっと数え切れないと思います。

１番印象に残ったのは子供たちとの交流会です。様々な出し物を考え，茶道や折り紙，歌で交流しました。折り紙では，ラオス語でなんというのか分からないことばかりだったので，前後をゆっくり，何度も何度も見せました。あまり話してくれなかった子供たちが少しずつ折り紙を覚えていき，私に次は？という顔をしたり，私が見せようと折り紙を掲げたら注目してくれたりしました。子供たちが折り紙を完成させて，それで遊んでいるのを見て子供たちに何かを教えるやりがいを感じました。言葉が通じないからこそ，わかろうと歩み寄ることができ，達成感もあったと思いました。何より，子供たちの可愛さに改めて気付かされ，私も将来は子供たちと関わる仕事がしたいと考えるようになりました。

この派遣で私は多くのことを学び，自分の将来について深く考えることができました。団員たちとの会話でも自分の将来に真剣に向き合うことができました。私は将来，難民の子供たちが国に馴染めるように教育を行い，その子供たちが幸せに生きるための支援を行う先生になりたいです。教育は世界を広げる手段だと思います。私の受けてきた教育も今回のような世界を広げるための手段だったと思います。これからも国際協力について考え，自分の夢に向かって全力で向き合いたいです。

コープチャイライライ！！！！



（本人：左）子供たちと折り紙



（本人：右端）団員たちと一緒に

団員が感じたこと

ラオスの温かい人々

鹿児島県立鹿屋高等学校２年
柿原　宗青

清潔で快適な建物，行き交う車。初日に泊まったドンチャンパレスホテルから見た光景に，私は言語以外の日本との違いを感じませんでした。初めての海外だった私は，ラオスが発展途上国だという偏見を強く持っていたので，想像以上に発展していた首都ビエンチャンに驚きました。

しかし，ホームステイ先のホーナーニャイ村，ホストファミリーの家に行ってみると，私が想像していた通りの光景が広がっていました。空調は扇風機のみ，そして，家中にヤモリがいました。

昨夜のホテルと比較したときのインフラの格差や慣れない言語，ホームステイを初めてする緊張，そして，私のホストファミリーの家から団員や同行者の家まで遠いことで，ラオスに来る前からあった不安はより強まりました。

その不安を無くそうと，まずはホストマザーと仲良くなる事を目標にしました。私は挨拶程度しかラオ語が話せなかったので，翻訳アプリや会話帳を使い，何とかコミュニケーションを取ることができました。

その後，ホストシスターが帰ってきたので，調理を手伝いました。ラオスの料理は辛いと聞きましたが，私に合わせて作ってくれたのか，作ってもらった料理はあまり辛くなく，とても美味しかったです。

また，片桐さんとサナブリアさんのホストファミリーと私のホストファミリーが親戚で，一緒に過ごす時間が多かったです。

三日目，ホストシスターが明日誕生日ということを聞き，何かサプライズをしたかったので，サナブリアさんに協力してもらい，明日に日本のお団子を作ることにしました。

ホストシスターの誕生日当日，サナブリアさんのホストファミリーの家を借り，他の団員や子供たちを呼んでお団子を作りました。子供たちと一緒にお団子を作る時，ラオ語で話せませんでしたが，ジェスチャーで作り方を伝える事かできたので嬉しかったです。お団子が完成したとき，ラオス流の「ハッピーバースデー」を歌ってホストシスターを祝い，ホストシスターに一番最初にお団子を食べてもらいました。ホストシスターは喜んで泣いていました。その様子を見て，私も嬉しくなりました。

その夜，ホストファミリーの親戚も来て，みんなで彼女の誕生日を祝いました。ホストシスターの14 歳の誕生日を祝えた事は私にとって一生心に残る思い出になりました。

村から離れる時，ホストマザーは私に「あなたの事は，本当の家族のように思います。」と言ってくれました。短い時間しか一緒に過ごしていなかったにも関わらず，そう言ってくれた事がとても嬉しく，別れがもっと寂しくなりました。

今回の研修では，病院や学校の訪問，日本文化の発表など心に残る思い出ばかりでしたが，それ以上にホストファミリーと過ごして感じた，人と関わる面白さや楽しさ，人の温かさがラオスでの一番の収穫だと思います。そして，この事業を通して国際関係の仕事に進みたい気持ちが強くなりました。

最後に，今回の事業で支えてくださった方々，団員，そして，優しく接して下さったラオスの方々に感謝を伝えたいです。コープチャイ！



(本人：右) ホストシスターとのツーショット



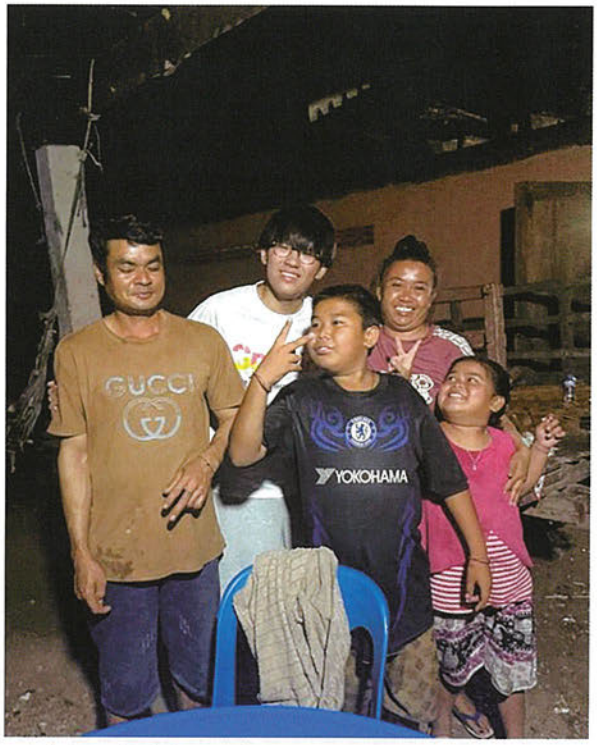
ホストシスターの誕生日

団員が感じたこと

ラオスの人の心にある豊かさ

鹿児島県立加世田高等学校２年
永谷　爽晴

帰国後，母への最初の言葉は「ありがとう」だった。夢を見ていたかのようなラオスでの日々は，私の将来の目標を明確にした。
およそ１５時間かけて着いたビエンチャン。空港のドアを開けると，日本では嗅いだことのない空気に包まれた。見慣れない文字や建物，赤と白で交互に塗られた縁石。
ホームステイ先の家は木造で，高床式になっていた。床の隙間から光が差し込んでいて，スーツケースを持って上がってよいか戸惑った。ホストマザーが私の布団の前に扇風機を置き，いろいろ話しかけてくれたが，何を伝えようとしているのか分からなかった。ホストマザーが部屋を出たあと，私は「使わないだろう」と鷹を括っていた翻訳アプリをダウンロードした。
村の一日は寺の鐘の音と鶏の鳴き声から始まり，ホストファザーが毎朝私の足を揺すり，起こしてくれた。二人で托鉢へ向かい，もち米や菓子，お金，白い花を器に入れ，お経を唱えてもらった。日本のお経と拍子が似ていた。
最初の視察先であるマホソット病院の杉浦看護師によると，病院全体のスキルアップを目標に，日々活動されているとのこと。言葉の通り清潔感があり，設備も整っていて，日本とさほど変わらない印象を受けた。視察が終わり村へ帰ると，ピノという男の子がボールを蹴るジェスチャーでサッカーに誘ってくれた。言葉は通じないが，仲良くなれたことが嬉しかった。
次の日，障害者施設で活動されている牧浦さんを訪ねた。「私と『障害者』ではなく，私と『あなた』という接し方を大切にしている。」と聞き，日本でもこういった考えが広がればと思った。村へ戻ると子どもたちから散歩に誘われ，木の実を取って食べさせようとしてくれたのだが，断ってしまった。今となっては，食べておけばと思う。
その後も，ラオ語を教えてくれたり，ごみ捨て場へ案内してくれたり，近所で集まって食卓を囲んだりと，皆が大きな家族のようだった。
ホームステイ最終日前夜，人生の節目に行われる豪華な儀式「バーシー」で，たくさんの優しさに包まれ，涙が止まらなくなった。
最後の朝食はとても豪勢で，主食のもち米や焼き魚，バゲットサンドなど品数が多かった。もてなしのお礼にと，満腹になるまで食べた。最後の日になって，ホストファミリーと過ごす時間をもっと大事にすればよかったと悔やんだ。
村には思いやりがあふれ，私の心を明るく照らした。日々に追われる私たちが忘れた大切なものを，ラオスの人はもっていた。この豊かさはお金では得られない。豊かさを象徴するものは，国や地域によって違う。私は，ラオスを単なる「発展途上国」の一つとして捉え，自分の暮らしを基準に世界を見ていた。無知がゆえ，いつの間にか偏見をもっていた自分がいた。国際交流の第一歩は，興味をもって知ること，そこで暮らす「人」とふれあうことであると，ラオスの人の笑顔に教えられた。
村の方をはじめ，第３３回までこの事業を繋げてくださった全ての方に感謝を伝えたい。「また，ラオスに行きます。」次は私が誰かを支える立場となって。



（本人：左から２番目）マイファミリー


（本人：前列右）ご近所パーティ

団員が感じたこと

ラオスに行って感じたこと

枕崎市立別府中学校２年
近森　郷

今回，僕は初めて海外へ行きました。ラオスは，父が青年海外協力隊として活動していた地であり，他の国よりも身近に感じていて行ってみたいと思っていた国です。

実際に行ってみると聞いているだけじゃわからなかったことや，日本では体験できないようなことがたくさんありました。首都ビエンチャンは大きなビルもあり，都会でした。しかし，今回我々がホームステイしたホーナーニャイ村は高床式の家や，クーラーのない家が多く，村の周りには水田が見られて父が話していたラオスのように感じました。ですがスマホは村の人はほとんど持っていました。

ホストファミリーの家ではWi-Fiや，テレビ，クーラーがありませんでした。家へ行くとまず最初に何が好きかを聞かれました。僕がマンゴーが好きですと答えるとすぐにマンゴーを切って出してくれました。まだ青くて完熟していないマンゴーでしたが，甘みは少なかったけど香りはマンゴーで食感はシャキシャキしていてとても美味しかったです。また，ホストファミリーの家ではたくさんニワトリを飼っていました。ごはんのために一羽か，二羽ほど出してくれました。

ラオスへ行って驚いたことの一つは，バイクについてです。ホーナーニャイ村では当たり前のようにヘルメットを付けずに運転したり子供が運転していたり，複数人でバイクに乗っていたりしていてとても驚きました。また，自転車を見かけることがありませんでした。僕は自転車で毎日通学しているので自転車がないことには疑問に思いました。おそらく地面が舗装されていなくて自転車では乗りにくいから自転車が無いのだと思います。

次に驚いたのは水回りについてです。お風呂は湯船に浸かることはなく，桶にためてある水を使って水浴びをします。またトイレはお風呂の水を使って流します。紙は流すことができず，隣においてあるゴミ箱に捨てます。父には紙は使わず素手でお尻を洗えと習いましたが僕にはその勇気はありませんでした。飲料水に関しては水道水は飲むことができずペットボトルの水を飲んでいました。

初めは日本とのあまりの違いに戸惑うこともありましたが，生活していくうちに，その土地にあるものを工夫して大切に使う生活なんだなと納得できるようになりました。村の子達との交流では僕は折り紙をしました。
村の子達はみんな折り紙が上手でした。特に紙飛行機や，手裏剣，キラキラ光っている折り紙，新聞紙が人気でした。それがきっかけで村の子たちと仲良くなることができました。一緒にサッカーをしたり，散歩をしたりして言葉がなくてもコミュニケーションがとれるんだと思いました。

村での四日間は一瞬で過ぎていきました。村とのお別れのときは帰りたくないという気持ちでいっぱいになりました。やりたかったホストファミリーとの料理ができなかったので，もし次にホームステイするときは一緒にキッチンに立ってラオスの料理を教わったり，僕からも何か作ってみんなで一緒に食べたりしたいです。勇気を出して応募してよかったです。コープチャイラーイ（本当にありがとう）。



（本人：左　ホストファミリーとの一枚）



（本人：右　ラオスでできた友達）

団員が感じたこと

異文化に触れて

鹿児島県立川内高等学校３年
河澄　裕貴

「ラオスから離れたくない」これが私がラオスでの活動を全て終えた時にまず頭に浮かんだ言葉です。おそらく今まで生きてきた中で一番濃い一週間だったと思いますし，これから生きていく中でもこの一週間を超えられないだろうと思います。それほどラオスをこの一週間で好きになってしまったんだと思います。

とにかく目に入ってくる物全てが面白くて，街では当然のような顔でバイクを三人乗りしている人や，家と店を兼ねているような空間，一本の電柱に対して可哀想なくらい大量に繋げられている電線，村では，教科書で見るような木造の家屋，普通に家の周りを散歩してる牛，山がなく永遠に広がる平野，庭にいる溢れんばかりの鶏など，今までイッテ Q で見てきたような憧れの世界がラオスでは広がっていました。

私のホームステイ先は，他の団員の家と比べると，ガツガツ話しかけてきたりするタイプではなく結構自然体な感じでまるで自分の家の様にリラックスして過ごすことが出来て，すごく居心地が良かったです。その上，市場に連れて行ってもらったり，畑の作業を手伝ったり，庭で釣りをさせてもらってそれを食べたり，虫を取って調理して食べたり，と，他の団員があまりできなかった体験をさせてもらったのですが，それらは彼らからしたらただの日常で，本当に客人を迎えているという感じではなくて，家族の一員として普段通りの日常の中に自然と溶け込ませてくれたそんなファミリーで，最高のファミリーでした。

ラオスで過ごしている間，ラオス語でまともな文を組み立てることができないまま過ごすことができたのが個人的にすごく驚きで，その経験から私は，言葉はあるに越したことはないが必須ではないなと思いました。これは私がラオスに赴いて得た一番の学びだと思っています。実際私がラオス人と対面した際，言えたのはこんにちはやありがとうだけで，他にも事前研修で学んだのですが，緊張で思い出せませんでした。しかし，ラオスの人たちがジェスチャーや実物を見せて「ラオス語ではこう言うんだよ」というのを教えてくれて，どんどん語彙力が増していきました。そこで得た言葉を不安交じりに使ってみて，伝わるとすごく嬉しくて，相手も私が話せた事を嬉しそうにリアクションしてくれているのを今でも思い出します。

それでも語彙力はもちろん足りないので，そういう時は身振り手振りでやり取りをしていました。村の子たちと遊んでいて気づいたことがあり，言葉が分からなくても伝えようという意思を一番前に押し出して，日本語でもいいから何か言葉を口にしてそこに身振り手振りを加えると不思議と意思疎通が取れるという事です。正直，ラオスでの生活の後半は言葉を覚えることはせずにずっと九割日本語，一割少しだけ覚えたラオ語，でコミュニケーションを取っていました。それくらい通じるのです。コミュニケーションは話せることが大切なんじゃなくて話そうという意思が最も大切なんだと気づきました。

私は日本で過ごしていた頃よりも，人に話しかける，関わることが好きになれたこと，違う文化，価値観の人との関わり方を知れたことがこの一週間での一番の収穫だと思います。いくら授業を受けても，いくらネットで色んな事を調べていてもこれらの収穫を踏まえた，この一週間で得たようなものは得られなかったと思います。だから私はこんな経験をさせてくれたこの派遣に参加して本当に良かったなって心から思いますし，よりたくさんの人にこんな経験をして，異文化を知る，海外に興味を持つきっかけにして欲しいなと思いました。

絶対いつかまたラオスに行こうと思います。



（本人：左から６番目）ホストファミリーと湖へ



末っ子に誕生日ケーキを塗られる

団員が感じたこと

かけがえのない時間

神村学園高等部２年
堀之内　七彩

「ラオスでの生活，どうだった？」「大変だった？」帰国後，私は家族や友達からそう聞かれました。そしてその度に，私は決まって同じ言葉を伝えました。「紛れもなく，人生で １ 番幸せな１週間だった！」

私はこの事業に参加する前，カナダへ短期留学をしており，海外で過ごすことにはある程度慣れていました。

しかし，事前研修で，ラオスでは英語が通じないかもしれないと知り，言葉が十分に通じない中で皆と仲良くなれるのか不安を感じていました。周りの人からも，本当に大丈夫かと心配され，私自身も，発展途上国に対してインフラが整っていない，十分に食事ができない，などマイナスなイメージを持っていました。しかし実際に訪れると，首都ビエンチャンはビルや綺麗な建造物が多く，ホームステイ先であるホーナーニャイ村でも，インターネットが使われ，子どもたちがスマートフォンを使いこなす姿がありました。先進国と比べると劣る部分はあれど，私が思い描いていた「発展途上国」とは全く違っていました。

そんな驚きと共に，私の新鮮なホームステイ生活と子供たちとの交流が始まりました。村では，朝はニワトリの鳴き声で起き，太陽が沈むことが家へ帰る合図です。日本とは違って家には時計がなく，時間ではなく太陽の動きに合わせてゆったりとした日々を過ごしました。ご飯の時間には，少し覚えたラオ語とジェスチャーで一生懸命会話をしました。「もうお腹いっぱい！」と伝えても，「ボーペンニャン！」と言いながら，どんどん料理を盛ってくれました。

また，私が村へ帰るとすぐに子どもたちが集まり，「ナナセ，今日は何をしてきたの？」と興味津々に聞いてくれました。散歩に行けば，私がケガをしないようにと，自分より何歳も年下の小さな女の子が，先に進んで安全を確認してから私の手を引いてくれたり，その底なしの優しさに何度も救われました。お寺で何時間も音楽に合わせて踊ったり，日が暮れるまでバレーボールをしたり，子どもたちとの毎日は笑い声でいっぱいでした。そしてそんな日々の中で，私も自然体の自分に戻り，皆と遊び，つながる幸せを感じることができました。言葉が通じなくても笑い合い，心を通わせられたことが本当に嬉しかったです。

だからこそ，村を離れる朝は本当に寂しく，朝早く村を出る支度をしている際に，ずっと陽気だったホストブラザーが，私に見られないようにすすり泣く声が奥から聞こえてきた時は，別れの辛さに涙が止まりませんでした。４日間でもらった折り紙や手紙，メッセージが書かれた T シャツをしまいながら，離れてしまえば，もう画面上でしか皆の顔を見たり声を聞いたりできないのだと思うと，行き場のない寂しさが込み上げました。

今回の派遣で，行ってみなければ知ることのできなかった幸せにたくさん出会いました。また，JICA の方のお話を聞き，支援する側の姿勢や，相手を立場で分けず，一人の人として向き合うことの大切さも学びました。そして，たくさんの優しさをくれた子供たちの未来を支える仕事に就きたいと思うきっかけにもなりました。

改めて，たくさんの愛情と幸せをくれたラオスが，私は大好きです。コープチャイライライ！



（本人：左前）村で仲良くなった子供たち



（本人：左）最終日の夜に書いてもらったメッセージ

団員が感じたこと

ラオスで学んだこと

霧島市立舞鶴中学校１年
金丸　京史朗

今回のラオス研修で特に印象に残っているのは，子どもたちとの交流と托鉢の体験です。

ラオスへ行く前の私は，ラオスの人と話すときは，英語を使えばある程度は自分の気持ちを伝えられると思っていました。しかし，実際に現地へ行ってみると，「Hello」や「OK」などの簡単な英語は通じても，それだけでは自分の伝えたいことを十分に伝えられず，最初は戸惑いました。その経験から，表情やジェスチャー，翻訳，簡単なラオス語など，相手に合わせて伝え方を工夫することが大切だと学びました。ラオスでは，４人家族の家庭にホームステイをしました。最初は思うように思いを伝えられないこともありましたが，生活を共にしたりする中で，少しずつ家族のような関係になることができました。

さらに，朝の托鉢にも参加しました。地域の人達がお坊さんにお金や食べ物をお供えする姿を見て，ラオスでは仏教が人々の生活に深く根付いていることを知りました。また，村の子どもたちとは毎日一緒に遊び，毎日３時間ほど散歩をしました。最初は緊張していましたが，一緒に過ごす時間が増えるにつれて，自然と仲良くなることができました。子どもたちは，私が楽しめるようにたくさん写真を撮ってくれたり，笑顔で一緒に過ごしてくれたりしました。帰国する日の別れ際には，ホームステイ先の家族から「これで５人家族だね」と言ってもらいました。短い期間でも心のつながりを作ることができたのだと感じ，とても嬉しかったです。帰国した今でも，２日に１回ほどビデオ通話をしています。言葉はあまり通じませんが，手を振ったり，一緒に笑ったりするだけで，お互いに楽しい気持ちが伝わります。この経験を通して，国や言葉が違っても，相手を思う気持ちがあれば心が通じ合えるのだと学びました。

今回の研修を通して，日本とラオスでは生活や文化に違いがあることを感じました。日本では，時間を守ることや約束を大切にすること，便利な環境の中で効率よく生活することが大切にされています。一方，ラオスでは，家族や地域の人とのつながりを大切にし，助け合いながら生活していました。ラオスへ行く前の私は，「外国の人と交流するには言葉が一番必要」と考えていました。しかし，今回の経験を通して，大切なのは相手を理解しようとする気持ちと，自分から一歩踏み出す勇気だと気づきました。

そして，今回ラオスで感じた家族や周りの人を思いやり，助け合う心は，ラオスだけでなく，世界中の人々にとって大切なことだと思います。国や文化，言葉が違っても，お互いを思いやり，支え合いながら生きていくことは，これからの世界をより良くしていくための，全人類の課題の一つではないかと感じました。

これからは，この研修で学んだことや感じたことを学校や地域の人たちに伝え，一人でも多くの人にラオスの魅力や国際交流の大切さを知ってもらいたいと思います。

最後に，今回のラオス研修を一緒に過ごした仲間，そして私たちを支えてくださった同行者の皆さんに感謝したいです。皆さんと一緒だったからこそ，たくさんの経験をし，多くのことを学ぶことができました。本当にありがとうございました。



（本人：中央）托鉢体験



（本人：中央）散歩中

団員が感じたこと

相手を思いやる心と笑顔

霧島市立陵南中学校１年
徳永　結咲

「まずは何でも受け入れることが大切だよ。五感で感じることで世界が広がる。」
これは，事前研修会で，団長である弓場さんがおっしゃった言葉です。その言葉が私の心に強く残りました。「どんなことでも素直に受け入れ，まずはやってみよう。そして，自分の目で見て感じてみよう。」そう心に決めて，私は一週間のラオス研修へ飛び立ちました。

私はラオスに対して，「あまり発展していない国」というイメージを持っていました。しかし，実際に訪れてみると，ホームステイ先にはインターネットやエアコンがあり，首都ビエンチャンには高い建物や大きなお店も並んでいました。自分の目で見て，感じることの大切さを学びました。

一番心に残っているのは，ホストファミリーとの時間です。入村式では，「どんな家族だろう。仲良くなれるかな。」と楽しみな気持ちと不安な気持ちでいっぱいでした。しかし，ホストマザーが写真を撮る時に肩を組んでくれたり，ホストシスターが荷物を持ち，手をつないで家まで案内してくれたりしました。初めて会ったばかりの私を，家族のように接してくれました。毎晩一緒に寝てくれたことも，私が安心できるように気遣ってくれていたのだと思います。言葉が通じなくても，相手を思いやる気持ちは伝わると実感しました。近所の子供たちとも毎日たくさん遊びました。一緒に散歩に行ったり，福笑いをしたりして，すぐに仲良くなりました。子供たちの明るい笑顔を見ると，私も自然と笑顔になりました。

ラオスでは，叫ぶほど冷たい水シャワーや辛い料理も体験しました。最初は驚きましたが，「まずは受け入れてみよう」と思うと，少しずつ慣れていきました。日本での当たり前が，国によって違うことも知りました。

障害者職業訓練校で，青年海外協力隊の牧浦さんのお話を聞きました。その人が幸せか，本当にやりたいことは何かを考えることが大切な支援だと教えてくださいました。私は，何でも手伝うことが優しさではなく，自分の力でできるように見守ることも相手を思いやることだと学びました。

楽しい思い出がたくさんできた一方で，ラオスには課題があることも知りました。首都ビエンチャンでは，生活のために道端で助けを求めている人に出会いました。私はお金を持っていなかったので，持っていたジュースを渡しました。喜んでくれて嬉しかったのですが，本当にそれでよかったのだろうかと考えました。「私にできることは何だろう。」この出来事をきっかけに，本当の支援とは何だろうと考えるようになりました。

今回のラオス研修を通して，私は相手を思いやる心と笑顔の大切さを学びました。ラオスの人たちが笑顔で接してくれたからこそ，私も自然と笑顔になることができました。そして，その笑顔がまた相手の笑顔につながることも感じました。私は，その温かさを周りの人へ広げていける人になりたいです。

私はラオスが大好きになりました。またいつかホストファミリーや友達に会いに行きたいです。たくさんの出会いや温かい笑顔をくれたラオス，本当にありがとう。コープチャイ！



（本人：左）大好きなホストブラザー



（本人：前列中央）村でのお散歩

団員が感じたこと

今までにない出会い

南さつま市立大笠中学校２年
窪　古詠

私は最初，この体験事業に，そこまでの情熱を持って臨んでいたわけではありませんでした。しかし，事前研修などを通していくうちに，この体験が一生心に残る思い出になりました。
私が応募を決めたときは中学一年生で，なんとなく暇を持て余しているような学校生活を送っていました。私は人との交流，学校ではあまりできないような体験学習，おまけに世界史好きで外国人や異国の文化に触れることが大好きでした。
もともと何にでも興味を持つ性格だったのですが，私の住んでいるところはかなりの田舎で，あまり外国の方との交流の機会がなかったのです。なんだか物足りなさを感じていました。そんな時，学校でくばられたプリントをみて，私はすぐに飛びつきました。青年海外協力隊の体験事業で，実際に外国に行けるというのです。私は外国に渡航した経験はありませんでしたし，とにかくなんでもやってみたくてすぐに応募しました。正直にいうと，まさか受かるとは思っていませんでした。面接がうまく行かなかったというわけではなく，周りはきっと高校生ばかりだと思っていたからです。しかし，実際に受かった人達をみると，中学生もたくさんいたので，ほっとしました。
ラオスに行く仲間たちの話を聞くと，三年間応募し続けてやっと受かった人や，親が青年海外協力隊の人，屋久島から来た人など，すごく積極的で，情熱を持って参加していることが分かりました。私はその時初めて青年海外協力隊を意識し始めたばかりだったので，同じ年頃の人たちがそんなことを考えていたのに驚きました。それに加えみんなすごく良い人達で，歳の近い友達があまりいなかった私にとって，すごく大切な友達がたくさんできました。クラス替えもなく，０歳の頃からずっと変わらないメンバーでやってきた私にとっては，新しい友達ができるというのはすごく珍しいことで，ただ喋ったり笑い合ったりするだけで胸が嬉しさに弾けそうでした。事前研修を重ねるうちに，仲のいい人が増えていき，ラオスに行くのが何倍も楽しみになりました。
ラオスに行くにあたって，私が一番心配していたことは，食事でも風呂でもなく，ホストファミリーとのコミニュケーションでした。ラオスの共通言語はラオ語です。今まで，言語が全く通じない相手と会話はしたことがありませんでしたし，何より，ホストファミリーが日本人を毛嫌いしているなどの可能性が怖かったです。ラオ語がうまく伝わらなくて喧嘩が起こってしまったら？こんな不安を抱えて，ついにホームステイする村に着きました。しかし，村につくと，現地の人が笑顔でこちらに手を振ってくれているのです。私たちを心から歓迎してくれていることが，一目でわかるような笑顔でした。私の胸にあった不安が，スッと溶けてなくなるような感覚がしました。
それからの村での毎日は，本当にかけがえのない思い出です。小さな男の子が，一緒に走ろう，と私の手を引いてくれたこと。ホストマザーと一緒に夕飯を作ったこと。別れるときは，一緒に遊んだ子供達が，私を抱きしめながら涙を流してくれたこと…。本当に素敵な人たちです。言語の通じない私に，一生懸命説明してくれる姿は，本当に優しさでいっぱいでした。嬉しかった思い出が多すぎて，何が一番嬉しかったか書くことができません。本当にラオスが大好きになりました。必ずまたこの国を訪れたいです。
改めて，同行者の皆さん，こんな私と仲良くなってくれた仲間達，色々な支援をしてくださった全ての方々に感謝を捧げます。本当に最高の思い出ができました。本当にありがとうございました。



（本人：前列右）ラオスの大切な友達と



村の子供達と帰り道で

団員が感じたこと

ラオスの温かさ

鹿児島県立指宿高等学校１年
小田　采和

私にとって今回のラオス派遣はあっという間で，一生忘れることのない経験になった。海外に行く事，ホームステイをする事，何もかもが初めて。言語の違いがあることへの不安を感じながらもなぜか，わくわく感が増した。

鹿児島を出発し，１０時間以上の移動を経てビエンチャン空港に到着した。ラオスの首都は，想像していた以上に都会的な雰囲気があり，人や店で賑わっていた。発展途上国ということから，貧困や生活環境が整っていないイメージだったが，実際には都市化が進んでいて驚いた。

翌日，ビエンチャンからバスで約１時間かけてホーナーニャイ村に到着。入村式では，ホストファミリーと自分の苗字が呼ばれ，とにかく笑顔を忘れず「サバイディー」と挨拶を交わした。お互いの心が通い合った瞬間を今でも鮮明に覚えている。すぐに手荷物を持ってくれるなど，ラオス人の優しい人柄にも触れることができた。家に着くと近所の子供達が大勢集まっており，ホストファミリーだけでなく，村全体から歓迎されている気がして嬉しかった。どのように子供達とコミュニケーションを取ろうかと不安はあったが，日本で流行ってる曲やキャラクターを知っていてすぐに打ち解けることができた。この経験から，ラオス語は話せなくても「お互いが気持ちを伝えようとする姿勢」が大切だと学んだ。

家では皆で夕食を囲んだ。料理を中央に並べもち米を手で丸め，色々なおかずにつけて食べた。事前に辛いのが苦手だと伝えていたからか，とても食べやすく味付けされており，家族の心遣いを感じた。また，会話も弾み，食事は栄養を摂るだけでなく，家族や村の人々との交流の場でもあるのだと感じた。

翌朝，鶏の鳴き声で目を覚ました。いつもは親に起こしてもらっていたので新鮮で心地よかった。朝早くから，托鉢(たくはつ)というラオスならではの仏教の習慣を体験させてもらった。「シン」という民族衣装を着てホストマザーと一緒に参加した。髪の毛も綺麗にセットしてもらい，いつもとは違う雰囲気を味わうことができた。日本でも仏教が長く信仰されているが，人に敬意を払うことの大切さはラオスの仏教においても同じなのだと改めて感じた。

文化交流では，村の子供達に書道パフォーマンスを披露した。名前を日本語に置き換え，漢字の当て字で表した。私が想像していた以上に反響があり喜んでもらえてとても嬉しかった。この異文化交流を経験した事で，日本の素晴らしい文化を海外に広める活動に興味を持った。

「まだ帰りたくない」と強く思えたのは，この体験事業を通して自分自身が大きく成長できたからだと感じている。このような貴重な体験をさせてくださった関係者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。コープチャイ！



(本人：右から２人目) ホストファミリーと最後の食事



(本人：右側中央) 村の子供達と書道で交流

団員が感じたこと

ー価値観，更新ー

大崎町立大崎中学校１年
脇山　葵

　また必ずラオスに帰る。
両手首の鮮やかなミサンガを見つめて心に決めた。まさかこんな決心を抱くとは想像していなかった。
　なぜラオスに興味を持ったか，それは開発途上国に対する先入観や固定観念を自ら覆したかったからだ。自分の価値観を再構築するための挑戦。目で見たもの肌で感じたものすべて財産にする。強い決意で臨んだ。
　ラオスに到着すると，日本より高い湿度に息苦しくなると同時に，あたりに飛び交う虫に早速苦戦した。メコン川の対岸側にはタイが望める印象的な光景が広がっていた。
　ホストファミリーと対面の日，ホストファミリーは満面の笑顔で迎えてくれた。日本から用意したお土産を渡すと，特に煎餅を気に入ってくれたようで「セーブ（美味しい）」と言いながら取り合いになるほど喜んで食べてくれた。
　薪をくべて火を起こし，ふるまってくれた家庭料理は辛さを調節してくれていた。肉・魚・野菜と具だくさんで見るからに栄養豊富。箸を用意してくれていたが，手で食べることにも挑戦した。しかし，なかなか上手くコツを掴めず，これは最後まで容易ではなかった。夕方になれば自然と家族が集まり，お菓子を広げて今日一日の出来事を話す。
そこには，私が取り戻すべき日常が広がっていた。
　ホストファミリーと別れの日，朝から私たちは口数が少なく，いつも笑顔の絶えない食卓がどこかその日は静かだった。寂しさと名残惜しさがそれぞれの胸に入り混じっていたのだろう。その日はいつにも増してたくさんのごちそうが並べられていた。
　ラオスの暮らし，それは特別なものを求めず，今あるものや時間を大切にし，日々の暮らしを丁寧に積み重ねていた。結局，指さし会話帳を開くことはなかった。表情と身振り手振りで十分心は通じ合った。
　もちろん，日本と比較すると現実的な課題にも直面した。ＪＩＣＡの支援により，不発弾の処理が進められているが，処理できたのはわずか１～２％と道半ばである。しかし，戦争の爪痕を未来に残さないための平和構築への取り組みに胸が熱くなった。　医療面においても医療機器の不足や衛生面の問題に加え，十分とはいえない医療サービスなど更なる医療体制の環境整備が必要と感じた。
　また，自らも左手に障がいを抱えながらも，障がい者職業訓練校に勤務する牧浦隊員が発した「障がい者を支援しすぎない」という言葉にはっとした。可能性を信じ「必要なときに必要な支援を」という思考の転換と気付きを得た。
　私は将来の夢は医師である。
その夢に「ラオスのために働きたい」という新たな付加価値が生まれた。これを起点に様々な開発途上国に足を運び，医療課題について学びたい。
　最後に，今回のラオス研修に携わってくださったすべての方々への感謝を胸に，学ぶことを止めず将来は医療を通じて国際協力に貢献したい。そして，同じ時間を共有した１７名の仲間へ，それぞれの未来へ羽ばたいていこう。
　ここからが出発点，私の価値観は更新され続けていく。
　コプチャイ　ラオス！　ハック　ラオス！



（本人：左）ホストファミリーとの初日，緊張！



（本人：中央）ホストファミリーと涙の別れ

団員が感じたこと

「始まりの国際協力」

屋久島町立中央中学校２年
中島　宗助

『積極的な自分になる』僕がこの事業を通して達成したい目標だ。僕はいつも失敗する自分を想像して，たくさんの不安を抱えてしまい，一歩踏み出せないときが多くある。しかし，そんな自分を変えたいという強い思いと，異文化に自らの手で触れてみたいという思いからこの事業に応募した。

一日目はラオスへの移動。ワクワクと不安を抱えながら海を渡った。実際に現地に着くと，独特の香辛料の匂いと，道路を走る多くのバイクの音がして，ここでやっとこれからラオスで過ごすという実感がわいた。

二日目の午前中は現地の観光をした。お寺や凱旋門（パトゥーサイ）を見学して，ラオスの歴史について学ぶことが出来た。午後はついに各ホームステイ先に向かう。ここでもうまく話せるか不安に思っていたが，ホストファミリーはみんな明るく，温かく出迎えてくれた。軽く自己紹介をしたところで，ホストブラザーが一緒にサッカーをしようとジェスチャーをして誘ってくれた。案内されたところで，たくさんの村の子どもたちと PK 戦をして遊んだ。その時，「ポケットに入っているスマホ危ないよ」とボールのあたらないように持っていてくれて，ラオスの人々の“行動で示すやさしさ”に感動した。夜ご飯も，僕が食べやすいようにと辛い物は避けて作ってくれた。

三日目はラオスに派遣されている団員の杉浦さん（マホソット病院），四日目は牧浦さん（職業訓練校）の話を聞かせてもらった。杉浦さんは，自分のためではなく，この病院全体が良くなるような志を持って働いているという話を聞いて，特に杉浦さんの行動力に感心した。牧浦さんは，自分も左手に障害を持ちながらも，生徒たちと支え合いながら毎日を過ごしている様子を見て，助け合う大切さを改めて理解することが出来た。

五日目の午前はホストファミリーと過ごした。朝早く起きて村の周辺を散歩したり，みんなでバドミントンをしたりして過ごした。やはり四日間過ごしてもスムーズに会話することは出来なかったが，みんなで笑い合って共に過ごした時間は，一生の宝物だと感じた。午後は学生交流をした後，バーシーという儀式をした。そこでは，村の人たち一人一人が，自分たちの腕にミサンガのようなものをまきながら，話をしてくれた。笑顔で今までの思い出を語る村の人々を見て，「明日でこの生活が終わっちゃうんだな」と急に悲しくなってきた。この四日間の間で，数えきれないほどのやさしさと愛情をそそがれ，僕の事を温かく迎え入れてくれたこの村から離れたくないという強い思いが胸に残った。

この経験を通して，こうした小さな出会いが国際協力の原点であり，最も重要なことなのではないかと感じた。ラオスの文化や生活から得た学びを今後の将来にうまく生かしていきたい。本当にこの事業に応募してよかったと感じた。

最後に，この事業に関わってくださったすべての皆様，本当にありがとうございました。

「ลาวสุดยอด！（ラオス最高！）」



（本人：右）仲良くなった友達



（本人：左から二番目）みんなで散歩

団員が感じたこと

私の考える国際協力

鹿児島県立錦江湾高校２年
片桐　梅

私は青年海外協力隊だった両親の影響で,国際協力に興味を持ちました。そして，ラオスへの体験事業で,その国に合った国際協力の方法を見つけたいと思いました。
ラオスに着いてまず感じたのは,「これがラオスか。」でした。想像より人が多くて,夜だったけれど町が明るかったです。笑顔で会話をしていたり,ご飯を食べたりしている様子から,とても楽しそうな印象を持ちました。
ホストファミリーとコミュニケーションが取れるか,ホームステイでの生活は大変だろうかと不安でいっぱいでした。しかし,ホストファミリーは笑顔で私を歓迎してくれました。スマホと,指差し会話帳と,ジェスチャーを使って,お互いに一生懸命会話をしました。特にホストシスターは「カエル」や,「ドラゴンフルーツ」など，たくさんの言葉を教えてくれました。使える単語が増えて,自分から話しかけに行くくらい会話を楽しむことができました。３日目には,翻訳アプリや指差し会話帳を使わずに,「５時にあなたのお母さんの家でお団子を一緒に作りましょう。」と伝えることができました。ホストファミリーが,「ありがとう」や,「おいしい」といった日本語を使ってくれたことも嬉しかったです。また,ラオスの生活は日本と少し違いました。シャワーはお湯ではなく水を浴び,犬や牛は,村の中を自由に歩いていました。最初は戸惑いもありましたが,不思議なことに慣れてしまえば不便に感じることは全く無かったです。そして,ラオスの村の人たちは家族や近所同士の繋がりをとても大切にしていました。毎晩ご飯を一緒に食べたり,誕生日を一緒に祝ったりしていました。日本にいるときよりも人の温かみを感じることができました。
ラオスの生活を体験する中で,ラオスの人々が今の暮らしを心から楽しみ,幸せに暮らしていることに気づきました。ラオスに行く前,国際協力とは日本の進んだ技術を教えることだと思っていました。しかし,ラオスで生活をしてみて,それは必要ないかもしれないと思うようになりました。現地の障害者訓練校で青年海外協力隊として活動している牧浦さんが,「健常者と障害者ではなく,私とあなたとして接する」と仰っていました。同じように,先進国と開発途上国ではなく,日本とラオスとしてお互いによいところを学び合うことが,真の国際協力だと思いました。
この事業で実際にラオスに行って,想像以上に自分が開発途上国に対して無意識に偏見を持っていたことに気が付きました。首都は十分に栄えていることや,村の人達はSNSを日本よりも積極的に使っていること,仏教が観光資源にまでなっていることなど,自分の目で見たことを,家族や友人など,周囲の人達に伝えていきたいです。
最後に,事業に携わってくれた全ての方々に感謝でいっぱいです。この事業で,この団員だったからこそ,充実した経験ができました。本当にありがとうございました。ຂອບໃຈຫຼາຍໆ!!



（本人：左）ホストシスターとあいあい傘!



愉快なホストマザー

団員が感じたこと

言葉を超えて，心で響き合う瞬間

鹿児島県立楠隼高等学校１年
竹之内　智廣

僕はこのラオス研修への参加が決まった時，一つ大きな不安を抱えていた。言葉の壁である。現地の言葉は日本語でも英語でもなく「ラオ語」だ。それだけを考えるだけで先の見えない道を歩むような気持ちになっていた。事前研修が２回あるとはいえ，短期間で公用語を流暢に話せるはずもない。「研修では最低限の挨拶や単語を覚える程度だろう」と，最初は高をくくっていた。

しかし，実際に受けた事前研修は，想像以上に実りあるものだった。単に言葉を学ぶだけでなく，ワークを通して団員同士の絆を深めるという大切な意味があったからだ。そもそも，この研修は単なる観光ではない。ラオスという国の魅力や課題，そして日本との違いを身をもって体感するためのものだ。

だからこそ，１人ではなく17人の仲間がいる。現地で壁にぶつかったり，新しい気づきを得たりした時に，互いに協力し合うためだ。そんな仲間たちの中で，僕はリーダーに立候補した。研修に参加できるだけでも貴重な機会だが，もともと人をまとめるのが好きなことに加え，他の団員とは違う視点から研修を捉えてみたいと考えたからだ。結果としてリーダーには届かずサブリーダーとなったが，役員３人のうち他の２人は先輩で，僕が最年少だった。最初は「自分に務まるだろうか」という迷いもあったが，先輩方の優しいリードに支えられ，３人で力を合わせて役割を果たすことができた。

こうして仲間と絆を深めて臨んだラオス研修だが，現地での体験は僕の想像以上に心揺さぶられるものだった。中でも，言葉や文化の違いを超えて深く心に残った出来事が２つある。

１つ目は，その場所だからこそ感じられる「幸せ」があるということだ。団員の１人が言っていた「幸せの形はそれぞれである」という言葉の通りだと痛感した。日本には日本なりの幸せがあり，ラオスにはラオスなりの幸せがある。たとえゲームのようなものがなくても，現地ならではの遊びがあり，みんなで楽しく過ごせているのなら，それこそが「幸せ」なのだ。僕たちはそれを肌で感じることができた。17人の団員はそれぞれホームステイ先の家庭で，それぞれの形の「幸せ」を貰ったのだと思う。これを読んでいるあなたにとっての幸せとは，どのようなものだろうか。お金がたくさんあれば必ず楽しいのだろうか。今一度考えてみてほしい。

２つ目は，個人的な体験だが，心から「元気」をもらった出来事についてだ。僕のホストファミリには，同い年の子がいた。その子は僕が困っているとすぐに手を差し伸べてくれ，彼のおかげでラオスで素晴らしい体験をすることができた。最終日の前夜，彼が僕に心を打ち明けてくれた。彼は以前「うつ病」に悩まされていたという。そして「君が来てくれたおかげで，たくさんの友達ができたよ」と話してくれた。その言葉が本当に嬉しかったのと同時に，僕自身の過去の記憶がよみがえった。実は僕にも，精神的にとても苦しくつらい時期があったのだ。当時の自分の葛藤と彼の気持ちが重なり，涙が溢れて止まらなかった。ラオスという言葉も文化も違う国で，互いに心を開き，本当の気持ちを分かち合えたことが何よりも嬉しかった。



（本人：前列左）全体写真



（本人：左）同い年の子との写真

団長報告

笑顔と心でつながった４泊５日

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長
弓場　秋信

私が本事業で団長として海外を訪問するのは、今回のラオスで７か国15回目となります。ラオスは、1965年に発足し、昨年60周年を迎えた青年海外協力隊の最初の派遣国であり、本事業としての訪問は今回で５回目となりました。

首都ビエンチャンから17名の団員と６名の同行者を乗せたバスは、約580人が暮らす稲作中心のホーナーニャイ村に到着しました。これから始まる４泊５日のホームステイに不安そうな表情を見せていた団員も、出迎えてくれた村人の温かな笑顔に接すると、次第に緊張がほぐれていきました。入村式では、「私たちは、この日のために事前研修を２回行い、ラオスについて学び、ラオス語も少し勉強してきました。言葉は十分ではありませんが、笑顔と心で交流したいと思います」と挨拶しました。

ホームステイ先は家庭によって環境もさまざまで、テレビやエアコンのない家も少なくありません。朝は鶏の鳴き声で目を覚まし、早朝には托鉢が始まります。私たちもカオニャオ（もち米）や果物、お菓子などを用意して托鉢に参加しました。食卓では手で丸めたカオニャオをおかずやスープとともにいただき、素朴な暮らしの中にラオスの日常を感じることができました。

滞在中には、青年海外協力隊員の活動現場を２か所訪問しました。マホソット病院で看護師として活動する杉浦隊員と、障害者職業訓練校で英語を教える、鹿児島県日置市伊集院町出身の牧浦隊員です。二人の活動や協力隊に参加した思いを聞き、団員からも多くの質問が出ました。特に同郷の牧浦隊員の話は、団員たちに強い印象を与えたようでした。

村での学校交流では、思いがけずバーシーの儀式にも参加することができました。祈祷師が人々の健康と安寧を祈り、村人一人ひとりが私たちの手首に綿の糸を結び、無事の帰国と幸福を祈ってくださいました。予定にはなかった心のこもった歓迎に、団員一同、大きな感動を覚えました。

学校交流では、書道、歌、踊りを披露しました。団員が子どもたちの名前に発音の近い日本の漢字を当てて揮毫すると、子どもたちは大喜び。最後に鹿児島の「おはら節」を踊ると、村人も自然に輪に加わり、言葉や文化の違いを越えた交流が生まれました。

村を離れる朝、寺には別れを惜しむ涙がありました。わずか４日間でしたが、21のホストファミリーと村人たちは、私たちを家族の一員のように温かく受け入れてくださいました。

ラオスの生活環境は日本と比べ、決して豊かとはいえません。しかし、村人たちの笑顔、家族や地域のつながり、人を思いやる心に触れ、「豊かさとは何か、幸せとは何か」を考えさせられました。

今回の経験を通して、国際協力とは一方的に「何かをしてあげる」ことではなく、相手を理解し、ともに考え、ともに歩むことだと学んだことと思います。

この４泊５日の経験が、17名の団員にとってこれからの人生を考える大切な財産となることを願っています。そして、ラオスで感じたこと、学んだことを周囲の人々に伝え、それぞれの夢に向かって大きく羽ばたいてくれることを心から期待しています。

私たちの心に残ったのは、ホーナーニャイ村の人々の笑顔と温かな心です。４泊５日という短い時間でしたが、国や言葉の違いを越えて、心と心はつながることを実感した旅となりました。



（本人：前列右から３番目）托鉢の様子



（本人：手前）村のお別れ会にて

同行者が感じたこと

挑戦と温かさに満ちたラオスでの日々

青年海外協力隊モルディブOV
仮屋　慶一

今回，県内各地から集まった中高生17名と同行者6名でラオスを訪れた。団員を引率する責任の重さと，初めてのラオスに飛び込むワクワクを抱えての渡航だったが，現地で過ごした日々は，団員たちの成長を間近で見るかけがえのない時間となった。

今回の派遣の中でも特に楽しみで，且つ心配な部分であったホームステイでは，私自身も海外協力隊時代を思い出す貴重な経験となった。ホームステイ先の村では英語がほとんど通じず，Wi-Fiがない家庭もある。ジェスチャーすらうまく伝わらない部分もあった。ラオス語の冊子と手帳を手に，「これは何？」と聞いてはメモを取る作業の繰り返しで，会話にならない会話が続いた。団員たちはこの状況をどのように乗り越えていくのか。とても楽しみだった。特に印象的だったのは，団員たちの言葉の変化だ。初日は「誰か助けてください」「Wi-Fiが通じなくて何もできないです」と周囲に頼る声が多かった。しかし数日後には，「自分で何とかする」「まずはやってみる」「こうしてみようかな」という前向きな言葉が自然と出てくるようになった。できないことを誰かに委ねるのではなく，今ある状況を受入れて，できることを少しずつやってみる。その変化を見守ることができたのは，引率者としてとても嬉しかった。

青年海外協力隊の活動視察では，お2人とも強い想いをもって活動をされているのを感じると共に，どこかラオス人のような優しさや大らかさを感じる雰囲気があり，不思議な気持ちになった。小児医療の現場で活動する杉浦隊員の病院では，カンガルーケアを通して家族の絆を育む取り組みが行われていた。障がい者職業訓練校で活動する牧浦隊員は，相手に寄り添いながら一緒に歩もうとする姿勢が印象的で，その表情はとても明るく，エネルギーをもらえるような視察となった。

ラオスで過ごした一週間は，17名の団員が自分自身と向き合い，他者と向き合い，変化していく姿を見届ける時間だった。入村式で緊張の中ホストファミリーと挨拶を交わしたり，慣れない水浴びやトイレに戸惑ったり，英語が通じないことに愕然としたり，お腹いっぱいと言ってもつがれ続けるご飯と格闘したり，行先も分からないままホストファミリーをついていくしかなかったり，最終日のホテルで断水したり，，。この1週間色々なことが起こったが，そのたびに団員たちは不安を抱えながらも，最高のチームワークとそれぞれの個性を活かして，全日程を無事に全員で終えることができた。同行者として心から誇らしく思うと共に，自分自身も挑戦し続ける姿勢はもちつづけたいと強く感じた。言葉を超えたつながり，挑戦する姿勢，家族の温かさ。どれも団員たちの未来に向けての力になると感じている。そして何より，団員たちが一生モノの経験や出会いを得た時間を，共に共有できたことが，私にとっても大きな財産となった。

本事業に携わってくださったすべての方々に感謝を込めて。

コープチャイ ライライ！



（本人：右から2番目）ホームステイ先の家族と



牧浦隊員による活動紹介の様子

同行者が感じたこと

優しい国ラオス

青年海外協力隊パラグアイOV（家政）
サナブリア　智子

今回の体験事業は始まる前からとてもワクワクしていた。ラオスという国のイメージが沸かず，自分の目で確かめたいと思っていた。また団員との出会いも楽しみだった。今回の団員は男女半分ずつの比率でとても驚いた。研修の段階から，率先して業務をこなす女子生徒，全員がリーダーのような男子生徒の姿を見て，今回の体験事業は素晴らしいものになると実感した。

２回の乗り継ぎを経て到着したラオスの首都ビエンチャンのワットタイ国際空港はとても綺麗で夜遅くにもかかわらず人が溢れ，とても活気があった。首都から約１時間で私達が滞在するホーナーニャイ村に着いた。首都から少し離れただけなのに，のんびりとした田園風景はとても懐かしいものを感じた。

私のホームステイ先は夫婦のお宅でした。初日は大きなヤモリに出迎えてもらい，ヤモリが鳥のようにチュンチュン鳴くということを初めて知った。私は６つの単語のみで５日間のホームステイを乗り切った。『お父さん』『お母さん』『おはよう』『ありがとう』『美味しい』『おなか一杯』そんな私を二人はいつもニコニコしてサポートしてくれた。私の為に新しい扇風機を部屋に置いてくれたり，朝にパンは食べないのに食パンと珈琲も準備してくれた。言葉は通じなかったけれど，お互いに気持ちを察した。笑顔という手段がこんなにも役立つのかと実感した日々だった。

お風呂の水浴びは，初日こそ気合を入れて体にかけていたけれど，翌日からは，暑くて汗をかいた後は冷たさが本当に気持ちよく，この場所だからこそ水浴びには意味があるんだと実感した。ラオスには沢山の果物があった。竜眼やランブータンは常に家にあり，ランブータンのライチのような味が好きで，一生分のランブータンを５日間で頂いた気がする。毎日お母さんの１１人の子供の誰かが家に来て一緒に食事をした。外で一緒に食べるのがこんなに開放的で気持ちいいのかと驚いた。暗くなったら寝て，鶏の声で目覚める。時計が無くても不自由ないこの生活は本当に幸せだと感じた。汗をかいたら水浴びして着替え，お父さんとお茶を飲み，お母さんの夕飯の準備を手伝う。イヤホンは持っていったけれど一度も音楽を聴きたいと思わなかった。飼っている牛の鳴き声だったり，夕飯を準備する音だったりがとても心地よかった。

この体験事業は『協力隊事業の縮図である』と感じた。５日間ではあるが，現地の人と同じものを食べ，同じ言葉を話し，同じ場所で寝る。その中で感じる事が大切なのだと。これこそが国際交流であり国際協力につながるのだと思う。それを若い段階で経験できた団員は羨ましい。これからの人生できっと役立つ日がくるだろう。今回は調整役ではあったけれど団員の中に溶け込み，団員をまとめる役に徹した。途中から団員の目線に立ち，自分自身も純粋に感動することが出来た。それはお別れ会の時，涙が止まらなかったことが証明している。

ラオスの人の優しさに触れ，ラオスの素晴らしさを自分の目で確かめる事ができた。そして『幸せの価値観を再認識』できた。この体験事業に関わったすべての人に感謝したい。

コプチャイ！ラオス！



（本人：右）家族で夕飯を食べる



（本人：前列左）団員にとけこむ私

同行者が感じたこと

同行者として安全と学びを両立するために

青年海外協力隊ラオスOV（助産師）
北村　愛

大好きなラオスに行けるということと多少ラオス語で貢献できるかなと思い，本事業についてほとんど知らないまま同行者の推薦をありがたく受けました。

しかし，ラオスという，だいたいが思うようにいかず医療面もかなりの後進国において，心身も社会的にも発達途上の中高生17人を，安全にかつ大きな学びの体験ができるようにすることがいかに困難なことかを徐々に認識して出発前数か月は緊張が増してきました。

今回同行した結果としては，大きなトラブルや病気・怪我もなく，17人それぞれが食事や生活様式に適応し，中高生ひとりひとりの表情と言動が明るく変化したことを感じました。そして，「思いやりがあれば言語の壁は超えられることを知った」「豊かさとは何か，幸せとは何かを深く考える機会になった」「自分のあたりまえが世界共通ではない」「国際協力は相手の暮らしと考えを理解することから始まる，一人の人間として向き合うことが大事」「違いを受け入れることの大事さ」「途上国に対する自分の偏見に気づいた」「将来進みたい道が見えてきた」などの言葉が報告会で聞かれました。

彼らの学びや気づき，変化をうんだ背景の一面には，中高生たちの持てる力（適応する力や挑戦する力，身体力など）の大きさと，丁寧な準備の過程，そしてラオス人の持てる力（支える力，受け入れる力，待つ力など）の大きさも関係すると思います。

ラオスはこの10年で経済成長目覚ましく，人々の生活も変化してきました。今回訪れたビエンチャン郊外のフワナー村では洗濯機や炊飯器がある家が増え，トイレが室内にあり，スマホを多くの人が持っている変化に驚きました。そういう中でも，あるがままを受け入れる彼らのおおらかさや温かいコミュニティのありようなど，残っているものも多く，ビクビクしていた中高生たちも「言葉はわからないけど，無条件に受け入れてもらっていること，大事にしてもらっていること」を肌で感じ，食事や生活上のハードルをひとつずつ乗り越えていけたのだと感じました。

また，目的と目標に合ったホームステイ先の選定，視察先の選定，そして限られた時間なので，体験の時間をできるだけ無駄なく過ごせることも大事です。私自身，こんなに過密なスケジュールをラオスで確実にこなした経験はなく，当初はもう少しゆとりのあるスケジュールでないと難しいのではないかと思っていました。結果論としてはラオスにおいては奇跡といえる過密スケジュールは成功し，中高生たちの大きな学びにつながったと思います。事務局スタッフが現地とのやりとりを継続的に根気強く丁寧に重ねた成果だと思います。

また，事前研修や課題の提出などは，中高生17人の覚悟をつくりチームワークをつくる過程に大事な機会となるため，どのような研修にするか重要だと改めて感じました。

安全」と「学び」の両立には難しさが伴います。個性や発達段階，抱える困難が一人一人違う中高生たちが，たった4日のホームステイで，安全性を確保しつつ，多少の「大変」を乗り越えた体験・助けられた体験を得ること，そして，幸せと感じ楽しいと思える体験，価値観が変わる体験などを，バランスよく得ることがとても大事だと思いました。時代の変化に伴う中高生たちのありようの変化，現地の変化に合わせて方法も変えていかないといけないなと感じました。



（本人：右）バーシー



ランボン練習

同行者が感じたこと

ラオスでの夏

南日本新聞社　報道部　記者
下畠　朋香

私のホストマザーは，読み書きが得意な方ではないと教えてくれた。翻訳アプリに頼るのはやめようと決め，つたないラオス語と身ぶり手ぶりで伝えるよう心がけた。

「学生たちの夕食の様子を取材したいので，18時に家を離れる」。これを伝えたいだけなのに，何度やりとりしても理解してもらえない。取材に出るのは諦めようかとも思ったが，それでもホストマザーは「ボーペンニャン，ボーペンニャン（気にしないで）」と笑顔で何度も聞いてくれた。腕時計の６を指さし，カメラで写真を撮るまねをしたり，ご飯を食べるジェスチャーを見せたり。５分ほどしてやっと伝わった。ホストマザーが頷いて優しく送り出してくれた瞬間，言葉の壁を越えて心の距離がぐっと縮まり，打ち解け合えたと実感してうれしかった。

ホームステイ初日の夕方，団員の家々を回っていると，子どもたちに手を引かれ散歩する団員と村のあちこちで遭遇した。到着からわずか数時間とは思えない溶け込みの早さに驚いた。「サバイディー」と「コープチャイ」以外のラオス語は聞き取れない。それなのに村人の表情やしぐさから，心から歓迎してくれていることだけは分かった。

ある団員の「村全体が家族だと感じた」という言葉に強く共感した。道ですれ違う人とは必ず何かしらの言葉を交わす。家族や親戚だけでなく，近所の人が自由に家を行き来する。約束をしている訳ではないが大勢で食卓を囲むことも多かった。自分のマンションの隣の部屋に住んでいる人も知らないが，たった５日しかいなかった村ではたくさんの「隣近所」の人と生活を共にした。クーラーがなくても，シャワーがなくても，テレビがなくても，他者をありのままに受け入れる寛容さがあった。物質的な豊かさだけでは測れない「本当の幸せ」の形を教えてくれた。

つい数ヶ月前までは，一度も海外に行かない人生だと思っていた。26 歳で初めての海外。もちろんパスポートも持ったことがない。ラオスはどこ？何語を話す？ラオス料理は口に合う？出発前も滞在中も不安は尽きなかったが，それ以上に，中高生 17 人の成長を１番近くで取材できる楽しみとワクワクで毎日いっぱいだった。村での生活を当たり前のように受け入れ，青年海外協力隊の訪問では隊員への質問が尽きず，市場では果敢に値下げ交渉に挑戦する団員たち。物怖じせず新しい環境に飛び込む姿に背中を押してもらった。

「日本人が思っているほど発展途上国は貧しくない。でも日本にはない貧困の課題もある」「協力隊の夢は遠い話ではなく近くの目標」「ラオスの人は幸せそう。その幸せを守る仕事をしたい」。団員たちが自分の目で見て，肌で感じ，思いを巡らせて口にした１つ１つの言葉から，現地での学びと成長を感じたくましく見えた。同時に，私自身もまた，勇気を出して「新しい世界」に踏み入れることがいかに人生を豊かにする貴重な経験であるかを実感した。

ラオスのみなさん，１７人の団員，同行者や関係者のみなさん，コープチャイ！



（本人：右から二番目）ホストファミリーと



（本人：中央）
バーシーで村の子どもが手首に糸を巻いてくれた

同行者が感じたこと

人生で決して忘れることのない１週間

鹿児島テレビ放送　報道部
轟木　康陽

まさか，この仕事をしていて海外出張をすることになるとは思わなかった。上長から初めてラオス行きを告げられたとき，私の頭に浮かんだのは「不安」の２文字だった。海外経験も少ない中，英語も十分に通じない国にホームステイをすることに正直，戸惑いが大きかった。その思いは，ともにラオスに行くことになった中高生１７人の方が，より強かったのではないかと思う。

ホームステイ初日から驚きの連続だった。お風呂は水浴び，トイレも手動で水を流し，トイレットペーパーもない。エアコンやＷｉ－Ｆｉもなく，扇風機を回しながら蚊帳の中で４日間を過ごした。そんな日本とは大きく異なる環境でのホームステイを通して，私は特に２つのことを強く感じた。

１つ目は「コミュニケーションは決して言語だけではない」ということだ。ホームステイをした村では，英語を話せる人がほとんどいなかった。そのため，自分の思いや伝えたいことは表情やジェスチャーを使って伝えるしかない。一見すると難しいように思えるが，実際はそうでもなかった。私がホストファミリーに話しかけると，相手もこちらの意図を理解しようとしてくれる。そして，意図が伝わるまで何度でも付き合ってくれる。そんなやりとりを繰り返すうちに，言葉が通じなくても少しずつ意思疎通がとれるようになっていった。

この経験から「コミュニケーションは決して言語だけではない」ことを実感した。異文化を理解するために大切なことは，単に相手の言語を理解することではない。お互いを尊重して相手の国や文化を知るためにコミュニケーションをとろうと行動を起こす姿勢ではないかと感じた。

ラオスで感じたことの２つ目は中高生１７人の成長だ。帰国後，中高生は口をそろえて「ラオス人は優しい」と話し，中には「日本人の方が裕福で幸せかと思っていたけど，ラオス人は裕福でなくても日本よりも幸せそうだった」と話す子もいた。確かに毎日の食事，睡眠，家族との会話など，私たちにとっては当たり前の日常をラオスの人たちは大切にして楽しんでいるように見えた。物の豊かさだけが必ずしも幸せにつながるわけではないことを中高生たちは村の人たちから教わっていた。そして，そんな村の人たちと過ごす中で，中高生にも日を追うごとに変化が見られ，村の人たちに心を開いていった。私は中高生が言葉が通じなくても村の子どもたちと一緒に遊び，笑い合う姿を見て，彼らはホームステイを通して「何事でも１歩踏み出す勇気」を得たのではないかと思った。また，中高生にとって青年海外協力隊として活動する杉浦隊員と牧浦隊員の活動を視察したことも大きな刺激となったようだ。２人のキラキラとした目を間近で見たことで，海外への憧れや新たな夢を抱いた子もいるのではないだろうか。

改めて，今回のラオス派遣を実現してくださった事務局や同行者，協賛企業などすべての人に心から感謝をしたい。

若いうちにこのような貴重な経験ができる中高生をうらやましく思う。この経験を胸にこれから中高生がどんな大人になっていくのかとても楽しみだ。



（本人：中央）伝統儀式バーシーで別れを惜しむ



（本人：右）村の子どもたちと交流

KTS 鹿児島ニュース



メディア同行 轟木康陽　記者
鹿児島テレビ放送 報道制作局報道部



【ラオス滞在記①】
英語も通じない、文化も違う　鹿児島の中高生17人がラオスの村でホームステイ　温かい歓迎に笑顔
8/4(火) OA
https://www.youtube.com/watch?v=KsCK2TQvixM

KTS1



【ラオス滞在記②】
「言葉が伝わらなくても楽しいことはできる」鹿児島の中高生がラオスで書道・折り紙で心つなぐ　青年海外協力隊員との出会いも
8/5(水) OA
https://www.youtube.com/watch?v=-nUuyKxlLEA

KTS2



【ラオス滞在記③】
「帰りたくない」涙の別れ　鹿児島の中高生17人がラオスのホームステイ最終日に感じたこと
8/6(木) OA

https://www.youtube.com/watch?v=htVEnNpr_o4

KTS3



ラオスで活動視察　青年海外協力隊の中高生が帰国報告　【鹿児島】
8/3(月) OA

https://www.youtube.com/watch?v=2I3MMqq0tKg

KTS4

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1　趣旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し，そこの国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで，国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校，施設などでの交流を通して相互理解を深め，国際性豊かな人材を育成する。

また，派遣後は，これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2　事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県ＯＢ会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：鹿児島県，鹿児島県教育委員会，独立行政法人国際協力機構九州センター

協賛：鹿児島県内の企業

3　派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4　派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した１０～１９名の中学生，高校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社，テレビ局など報道関係者

5　実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会，表敬訪問，報告会なども実施

6　経費

この事業の実施に要する経費は，実行委員会の構成団体，協賛企業，共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国（地域）	派遣期間	人数（生徒数）	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第１回	マレーシア（コタキナバル，サリマンドゥ）	平成3年 3/27(水)～4/3(水)（7泊8日）	17名（10）	鹿児島市，阿久根市，名瀬市，市来町，伊集院町，祁答院町，内之浦町，佐多町	公募
第２回	マレーシア（スプランバラ）	平成4年 3/27(金)～4/3(金)（7泊8日）	17名（10）	鹿児島市，鹿屋市，大口市，指宿市，隼人町	公募
第３回	マレーシア（クチン，テラガアイール）	平成5年 7/23(金)～7/30(金)（7泊8日）	17名（10）	鹿児島市，加世田市，三島村，隼人町，志布志町，高山町	公募
第４回	インドネシア（バンドン，バシールカリキ）	平成6年 8/1(月)～8/7(日)（6泊7日）	15名（9）	鹿児島市，出水市，指宿市，垂水市，菱刈町，霧島町	公募
第５回	マレーシア（コタバル）	平成7年 7/30(日)～8/6(日)（7泊8日）	16名（10）	鹿児島市，国分市，頴娃町，宮之城町，隼人町，吾平町，根占町，中種子町	公募
第６回	マレーシア（タイピン，バリットムンソントリー）	平成9年 7/27(日)～8/3(日)（7泊8日）	16名（11）	鹿児島市，串木野市，東市来町，伊集院町，郡山町，日吉町，吹上町，金峰町	市町村推薦
第７回	マレーシア（クチン，テラガアイール）	平成10年 7/26(日)～8/2(日)（7泊8日）	25名（20）	鹿児島市，大口市，国分市，菱刈町，姶良町，蒲生町，溝辺町，横川町，栗野町，吉松町，牧園町，	市町村推薦
第８回	タイ（アユタヤ，ルンカーオ）	平成11年 7/30(金)～8/5(木)（6泊7日）	14名（9）	鹿児島市，指宿市，加世田市，喜入町，笠沙町，知覧町	市町村推薦
第９回	タイ（チェンマイ，メーカンポン）	平成12年 7/24(日)～7/31(月)（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，鹿屋市，国分市，垂水市，祁答院町，財部町，末吉町，串良町	市町村推薦
第１０回	ベトナム（ホーチミン，フーホイ）	平成13年 7/20(金)～7/26(木)（6泊7日）	19名（13）	鹿児島市，出水市，加世田市，国分市，垂水市，祁答院町，溝辺町	市町村推薦
第１１回	ベトナム（ホーチミン，タンビン）	平成14年 8/4(金)～8/10(木)（6泊7日）	17名（11）	鹿児島市，串木野市，枕崎市，国分市，垂水市，溝辺町	市町村推薦
第１２回	タイ（予定：ナコンラチャシマー県）	平成15年　SARS及び　鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第１３回	マレーシア（クアラルンプール，マラッカ市，トレンガヌ州）	平成16年 7/19(月)～7/26(月)（7泊8日）	13名（9）	鹿児島市，枕崎市，国分市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第１４回	ベトナム（ハノイ，ホアビン省モーハイ村）	平成17年 7/24(日)～7/31(日)（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，枕崎市，串木野市，国分市，知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第１５回	マレーシア（クアラルンプール，マラッカ市，サバ州）	平成18年 7/22(土)～7/29(土)（7泊8日）	18名（12）	鹿児島市，枕崎市，霧島市，知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第１６回	ベトナム（ハノイ，バクザン省，バクニン省）	平成19年 7/22(日)～7/29(日)（7泊8日）	23名（17）	鹿児島市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第１７回	ラオス（ビエンチャン県ボソミー村）	平成20年 7/20(日)～7/27(日)（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第１８回	ラオス（ビエンチャン県ナーソン村）	平成21年 7/19(日)～7/26(日)（7泊8日）	18名（14）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第１９回	インドネシア（南スラウェシ州ビナバサ村）	平成22年 8/1(日)～8/8(日)（7泊8日）	19名（13）	鹿児島市，鹿屋市，霧島市，南九州市，南さつま枕崎市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２０回	マレーシア（グランタン州クバンテラガ村）	平成23年 7/24(日)～7/31(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２１回	ベトナム（ホーチミン市，ティエンザン省グィントォイ村）	平成24年 7/22(日)～7/29(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，霧島市，南九州市，南さつま市，枕崎市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２２回	ベトナム（ダナン市，ホイアン市）	平成25年 7/21(日)～7/28(日)（7泊8日）	23名（17）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２３回	カンボジア（プノンペン，バッタンバン）	平成26年 7/20(日)～7/27(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２４回	カンボジア（プノンペン，カンダール）	平成27年 7/19(日)～7/26(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２５回	ラオス（ビエンチャン都，ビエンチャン県）	平成28年 7/24(日)～7/31(日)（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２６回	ラオス（ビエンチャン都，ビエンチャン県）	平成29年 7/23(日)～7/30(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２７回	スリランカ（西部州，ガンパハ県）	平成30年 7/25(水)～8/1(水)（7泊8日）	21名（15）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２８回	カンボジア（プノンペン，シェムリアップ）	令和元年(2019) 7/21(日)～7/28(日)（7泊8日）	21名（15）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第２９回	ラオス	令和2年(2020)　新型コロナウイルス感染症の影響により中止			市町村推薦 実行委員会推薦
第３０回	マレーシア（クアラルンプール，ペラ州）	令和5年(2023) 7/23(日)～7/30(日)（7泊8日）	21名（15）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第３１回	カンボジア（プノンペン，シェムリアップ）	令和6年(2024) 7/21(日)～7/28(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，薩摩川内市，霧島市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第３２回	ベトナム（バクニン省トゥラン坊）	令和7年(2025) 7/19(土)～7/26(土)（7泊8日）	24名（18）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，薩摩川内市，霧島市，南さつま市，南九州市，大崎町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第３３回	ラオス（ビエンチャン首都ナーサイトン郡）	令和8年(2026) 7/19(日)～7/26(日)（7泊8日）	23名（17）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，薩摩川内市，霧島市，南さつま市，南九州市，大崎町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計７カ国	計（427）平均14人			



＝編集・発行＝
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
〒890-0816 鹿児島市山下町 14-50
カクイックス交流センター1 階
公益財団法人鹿児島県国際交流協会
担当：福永，仮屋，菊地
TEL:099-221-6620　FAX:099-221-6643
裏表紙デザイン：脇山　葵　（大崎中学校１年）